
骨の王を宿した娘

柊鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

骨の王を宿した娘

【Nコード】

N6570F

【作者名】

柊鏡

【あらすじ】

竜がでるといふ丘に一人の剣士がやってきた。

一章

一・難所竜口峠りゆうぐち

多くの旅人、旅客馬車が異様なほど、宿場町に溢れていた。

天上皇帝への袂たもとへ向かう分帝わけみかどや地方権力者の行列、又はまた奴隷商人の隊商でもない。

只単ただに、と言ってしまえば元も子もないが、ようするに旅人たちは立ち往生していた。

そもその発端は、朝一番に出立した一行が「竜が出た！」と逃げ帰って来た事に始まる。

竜そのものは、よくいる魔物の上級種族でしかなく、傭兵部隊を一個小隊雇えば、難なく切り伏せる事が出来るだろう。

しかし、竜と一口に言っても、種類は雑多でその強さ恐ろしさもその種類に依よって大きく桁を変える。

逃げ帰って来た一行の恐怖の表情が尋常ではなかったので、他の者は彼らに問質といただした。

「何が出た？」

「二首大蛇ふたくび おろちだ」

その答えに他の旅人の顔も恐れ戦きに彩られた。

二首大蛇とは竜の眷属の中でもかなり上位に位置し、名は体を現すの通り、二つの頭を持ち五階建ての建物に匹敵する体高を有する竜の中の竜だ。

人々が足止めを食っている先の街道にあるのは、竜口峠と言う。これ又、名は体現するの如く、竜の頻出する場所だ。

生態学者に言わせれば、竜の好む地形、特に出産に適していると言う。

竜の出産は春先に行われ、その地で子育てをし、秋口には去る。だから、竜口峠を越える事は竜と遭遇する危険を想定して人々は

日程をプランニングする。

臆病者は護衛を雇い、荷の少ない者は逃げ腰をスタンバって峠道に挑む。

時に死者は出るが、例年、小物の竜ばかりで帝都への最短工程である事を考えれば、元は取れた。特に湿気に弱かったり、日持ちしない商品を扱う商人にとっては越えなくてはならない道なのだ。

そういう事を理解している人々にとっても二首大蛇の出現は想定外だった。

過去の宿場町の記録資料を漁っても、二首大蛇が現れたという話はない。

しかも、運の悪い事に、今は春先。

間違はなく、二首大蛇は出産にやって来ていた。

人々は口々にぼやいた。

無理に峠を越えようとしても、雇った護衛や傭兵がびびってしまい、話にならないのだ。

単身や護衛なしで越えようなんて考えられない。それはバカのする事だった。

命あつてのモノダネである。

しかしながら、人が寄ればバカは何人かいるもので、「二首大蛇出現」の報を聞いても意に介さず、峠越えを実行した猛者もいた。

竜は夜行性だから、昼に行けば問題ないと言い、出立した隊商があつたが、夕方にたった一人だけ宿へ逃げ帰って来た。

他のメンバーはどうしたのか？ と聞く他の旅人達に逃亡者は答ええた。

「食われた」

と。

食われたと言うのは恐らく的確な表現ではない。

出産に臨む為、気性の荒くなった竜に噛み殺されたのだろう。峠には犠牲者の屍が溢れている筈だ。なにせ竜は出産中、食事を摂らない。

帝国人にとって竜が出産に際し、食事しないと言うのは常識だが、恐怖によって籬の外れたパニック状態の人間に正常な判断力もあるう筈がなく、そして、「食われた」発言は、益々、宿場町を恐慌状態に誘った。

正常な判断の出来なくなった人々の多くは、「どうする、どうする」と右往左往するばかりで何ら解決策を生み出せぬ儘、^{まま}何日か過ぎた。

懸命な旅人は回り道を選んだ。

けれども、日が経つにつれ、遠回りをしようにも如何にもならない旅人や商人も多かった。宿場町としては、多くの金が落ち、願ったり叶ったりだったが。

そんな状況の竜口峠前宿場町に一人の男がやって来た。

情報に聡い商人達は出現の報せに伴い、峠にやって来ず別ルートを選択していた為、宿場町にとって、何日か振りの新しい客だった。足止めを食らった儘、動けず何も出来ない人々は自分の事を棚上げし、その男をバカなヤツだと罵って、酒の肴にした。今の竜口前宿場町でする事と言ったら、昼からビール以外にする事がないのだ。だが、男はバカではなかった。ある意味バカだったかもしれないが、彼には腕に自信があった。例え、二首大蛇に勝てずとも殺される心配等していなかった。

出産中なら、巢の場所さえ切り抜ければいいのだ。

だから、「お前はバカか？」と酔っ払いが言う度に、男は「俺は竜に一泡噴かす」と豪語した。

男は暫く逗留して、町を発った。

空は青々として雲一つなく、清々しさが溢れていた。

レゾンはそんな青空を見上げて、一つ溜息をした。

空がこんなに綺麗なのに、足元がこんなでは気分が滅入る。と言

う意味がその息には籠っている。

レゾンの足元、そこには腐り切り、腐臭を惜しみなく垂れ流す死体があった。

恐らく、竜にやられた隊商のメンバーの一人だろう。

半ば、白骨化も始まっている。蠅が周囲を旋回し、黒ずんだ肉に蠢く何か、蛆が確認出来た。

余りに腐敗が早い、その理由を死体は如実に語った。

頭部が死体にはなかった。

頭部だったと思しき物が付いてはいるのだが、原型がない。

「魂を獲られたか」

レゾンは一人ごちた。

レゾンは魔法に詳しくはなかったが、脳味噌ブラセイル、頭蓋骨の中にあるグチヨグチヨの器官が魂の保管庫である事は知っていた。

これは生物全てに共通で、魔物だろうと人間だろうと、頭を落とす事で確実に殺す事が出来る。又、これは逆に頭のない動く物は生物ではないとも言える。

そして、魂の恩恵を失った体は簡単に朽ち果てる。

例え、二首大蛇だろうとも、その二つの首を落とせば生きてはいられないだろう。

加えてこの死体の状況は、二首大蛇が魂を奪うと言う生態学者の学説を裏付けているようにも思える。もっとも、只単に潰ただされただけかもしれないが。

が、もし生態学者の言が正しいなら用心しなくてはいけない。

魂を奪えると言う事は、魂に敏感である事。

人間には五感しかないが、二首大蛇は魂を感じる事が出来るかもしれない、そういう可能性を示唆する。

「まずいなあ」

意気揚々と宿場町を出たはいいが、思った以上に難儀な物、そう思うと又嘆息してしまった。

「はあ」

援軍はない。

引き返そうか、そう思った時レゾンの真横を人影が掠めた。その人物が起こした風がレゾンの前髪を撫でる。

その人物はやたら早足だった。

竜に怯え早く峠を抜けようとしている、と言うよりはハナから二首大蛇の事等眼中にないようにレゾンは感じた。

きっと、何処ぞの猛者に違いない。そう確信して、レゾンは背中に声を掛けた。

「えっと、その人」

呼ばれて、動きが止まる。

さっきまでの早足が嘘のような緩慢な動作で人物は振り返る。

「あ、っと」

レゾンは言葉を失った。

猛者？

何を自分は勘違いしたのか、そう思う反面、その人物の顔に目は釘付けだった。

人物は少女だった。年齢は十八前後。

背丈と後姿で判りそうな物だが、無意識下でレゾンも緊張していたのだろう。そして、今度は違う意味で緊張した。

少女はレゾンの少ないボキヤブラリーで「絵に描いたような美人」と言えた。

まさか、死地かもしれない場所で、こんな人に会えるとは、これは死亡フラグではないかとレゾンは一瞬思う。

「何？」

さもダルい、早くしてくれと言わんばかりに少女は言う。けれども、口調ばかりで面は殆ど無表情。綺麗なエメラルド色の瞳が気だるく瞼で隠されている位で他の部位はピクリとも動かない。

「お嬢さん」

何て言うべきか？

きっと、このお嬢さんはここが危険な場所だと知らないのだ。

見れば、何処か高貴なオーラを漂わせているではないか。

例えば微風に靡く肩甲骨辺りまで伸びた銀の髪とか、足元まで覆い隠した何処か救世堂のシスター服にデザインの酷似した黒のワンピースとか。その衣装もカラーだけ純白な所とか。

中々答えないレゾンの業を煮やしたのか、少女は、

「何？」

と又言う。さっきとトーンが変わらない。録音魔法盤おことりまほうばんの再生音のよう。

「えっと、お名前は？」

トンチンカンな事をレゾンは言う。もう、自分でも何が何だか状態。

「どっち、は、いい？」

会話のキャッチボールがおかしい。

レゾンが暴投したからか、少女の投げ返す球も暴投だった。

どっち？ 意味が分からない。それに何？ と言う短い言葉ではよく分からなかったが、何処か言葉遣いが拙い。発音も少し奇妙。変なアクセントが付いている上、単語の切り方が妙だ。

「えっと」

「そっち、は、いい？」

そっち？

自分に名を言えと言っているのだと思い、レゾンは名乗る。

「レゾン・カンナム。二十五歳、聖堂騎士せいどうきし、階級は第七法守きりぱはめんか」

聞かれてもいないのに、年齢と職業まで答えるレゾン。かなり、テンパっているのが分かる。

「知つて、る」

知ってる？

確かにレゾンは聖堂騎士のロゴ入り皮鎧を来ているし、右耳には聖刻ハマンドのあるピアスが下がっている。それは分かる。しかし、階級まで分かる筈はない。

段々とレゾンにも相手の少女が何者か、読めて来る。

きっと、頭の弱い貴族令嬢なのだろう。恐らく精神病院（キチガイの巢）から逃げて来たのだ。だから、感情の起伏がないのだろう。精神病院は魔女の厨より恐ろしいと耳にする。

「お嬢さん、私めと戻りましょう」

レズンは一旦引き返す事にした。

宿場町まで戻れば、何か分かるだろう。そして、一応、何処の貴族か知っておかなくては。

「名前、いいですか？」

少女は少し考える。

「だかん、どっち？」

「えっと、じゃあ、普通の方で」

やけくそになって、レズンは言う。貴族なら、普通の方と言えばフルネームを答えるだろう。

「私、マール」

マール。短い名前。少女は言葉が続けない。ファミリネームやサーネームを持たないのだろうか。なら、貴族ではない事になる。

「それで、きいみ、何する？」

又よく分からない台詞。重度の障害者^{ガイキチ}か。なら、自分の本名を言えないのも分かる。

「レズン、何する？」

レズンです、と言い直そうとして――止めた。
埒が空かない。

仕方ないと、レズンは少女の左手を――。

腐臭がした。

近くで転がる死体ではなく、少女から。

レズンは背筋がゾクつとするのを感じ、その後、脳味噌が揺さぶられる感覚に襲われた。自らの魂が怯えている。何だ、この少女は？
死体でも漁っていたのか。

そうだ、普通の神経なら、そこの屍に反応する。

少女はどうだった？

意にも介さず、素通りした。

何かがおかしい。奇妙、奇怪。この頭を巡る怯えは何だ。

精神患者（気狂い）に戦くのか、それでは民を救済する救世堂の聖堂騎士失格ではないか。

幾ら、貴族と大聖堂が反目しているとは言え、もとい、少女が本
当に貴族かも怪しいが――。

ネトラマフア
怨霊魔術師。

ふと、レゾンの脳裏を過ぎる一単語。

ガラセテダー
大聖堂の敵。民の敵。そして、反目する貴族とも敵対する。いや、
彼らは全ての人類の敵。生者の敵。

聖堂騎士見習いだった時、座学で聞いた怨霊魔術師の話をレゾンは
思い出す。

古から黒い魔法と呼ばれ、真つ当な魔術師なら決して手を出さない
魔術体系。

禁断の魔法。

神から与えられた生を踏みにじり、神の教えもその子等も全てを
冒瀆する闇の魔術師達。

彼らは死体を操る。

彼らは骨の軍団を従えている。

彼らは人から魂を奪う。

彼らは脳味噌を弄り、魂に細工する。

精神障害者の少なからぬ数が彼らの毒牙に掛かった所為とも言わ
れている。

その実、怨霊魔術師そのものに出会った人は少なく、一体、帝国
もとい世界に何人いるのかすら判然としない。

古い書物に骨の軍団の記述はある。

幾つもの古代国家が死者に蹂躪され果てた。

しかし、それは暗喩か何かではないか、そう言う歴史学者もいる。
高名な魔術師も口を揃えて言う、怨霊魔術の体系等神話だと。民間
魔術の成れの果てではないか、とも。

二首大蛇が魂を奪う、その話を思い出し、魂をなくした死体を見、精神障害の少女を見つけてしまったからだろうか、正式採用の試験をパスして以来忘れていた記憶が克明に蘇った。

だが、少女は口を利いている。頭部だってちゃんとある。腐臭がするからといって、今握る手にはきちんと温もりもある。

「手、放す」

マールの声に意識が現実に戻り戻る。

マールの右手がレゾンの左手に触れる。

冷たい。山間部の湧き水のような温度。左手とは打って変わって人間らしくない。

今しがた押さえ付けられた怨霊魔術師と言う言葉が再び鎌首を――

レゾンは頭を振る。

ええい、忘れろ。

今は、この少女をエスコートする事だ。只単に冷え性かもしれないじゃないか、と自分に言訳する。勿論、冷え性だからって、こんなに冷たい筈はないと言う事は承知していたが。

「レズン、手、放す」

マールは強引にレゾンの手を引き離す。

「あつ、でも」

「行く」

言って、マールは歩き出す。やはり早足。背筋を伸ばした儘機械みたいに歩く。

レゾンは駆け足で追いつき、言う。

「でも、危ないですよ」

「でい丈夫」

「竜が出るんですよ？」

「知つ、てる」

「知ってる？」

「くっそ」

竜が如何に危険かこの少女は理解出来ないのだ。

レゾンは腹を決める。

聖堂騎士のお役目、そして、美人を守るのはやはり騎士の務め。
腰に吊るした法具に手を掛ける。何時竜がお出ましになってもいいように。

第九級法具^{ハムナキト}断骨^{だんこつ}。剣の形状をした法具で、着任の際に救世堂堂主^{セテダム}カリミラより授かった物だ。

決して等級は高くない、並の竜なら骨ごと断ち切る事が出来るだろう。しかし、今度の相手には利くまい。しかし、法具には奥の手がある。

断骨で言うと、鐐の辺りに付いた救世堂の聖刻、その裏に嵌った^{マフライム}固化凝縮魔法液を暴発させればいい。目暗ましにはなる。竜と言えど二つの目を持つ生物には違いない。

その隙に逃げればいい。

お咎めはくうからも知れないが使命の為なら、堂主さまも許すだろう。

レゾンはマールに合せて歩いた。

峠道は徐々に険しくなっていく。

段々、右手に崖が現れ、次いで左手にも断崖が出現する。

峠と言ひよりは切り通しの道と言う風情になって、崖が高くなつていくにつれ、竜の鳴き声が聞こえ出す。

二首大蛇以外の竜も出産に來ているのだろう。

岸壁に穿たれた穴から緑の鱗で覆われた竜の首が覗く。

レゾンとマールを目の端に捕らえるが、動く気配はない。

下級の竜は大抵、卵生で鳥のように暖めなくては孵らない。だから、動くに動けないのだ。学会では、卵生と胎生があるので、出産と言う表現はおかしいと言う意見もあるらしい。

しかし、死体のあった場所から大分進んだものの二首大蛇は影も形もない。

商人同士の争いに端を発するガセネタだったのか。
が、死者は出ている。

レゾンは取り越し苦労だろうか、そう思い一瞬気が緩む。

その時、風、否、突風が二人を捉えた。

凄まじい豪風ごうふうに体はバランスを失い、千鳥足の如く震え、尻餅を付く。

「うわっち」

「い、たい」

臀部でんぶを擦りつつ、目線を上にずらすと、いた。

二首大蛇。太陽を遮り、バカでかい図体で二人を隠す。

アウウウウ！

そして、唸った。鼓膜が潰れそうな不快音波。

耳を塞ぎ、見上げている場合ではない。

レゾンはマールを引っ張って、強引に立たせ、竜の足元へ走った。

巨大過ぎると言う事は、小回りは悪いに違いない。そう、レゾンはふんでいた。

今、竜は二枚の羽根を羽ばたかせ、嵐のような風を生み出しつつ、飛んでいる。足元はがら空きだ。

それに後退して、ブレスを吐かれてしまっただけはお終いだ。

風に抗い、走る、走る。余りの強風に端から見れば歩いているように見えるかもしれない、けれども、走った。足の筋肉が、風によって押し曲げられそうになる骨を、間接を押し戻す。

筋肉が歪む、軋む、それでも鞭打って走る、ようやく、竜の足が頭上に来る。

竜は動かない。読み通り、レゾンは小さく心で最初の勝利を叫ぶ。抜ける。あと少しで股抜け、瞬間、咆哮ではない大音響と立ってられない程の振動。

砂埃が舞う、足は言う事を利かなくなり、石ころが足を捕る。

「くう」

「あひ」

こけた。盛大に前につんのめり、手を握っていた為にマールも巻き込まれた。だが、意地でもって手は放さない。

竜はどうやら、踏み潰すつもりだったようだ。

二人の両脇を赤い鱗の壁が塞いでいる。

しかし、ここでも図体の大きさは比して小さな人間を踏み付けるには不利だった。

丁度、両足の間の下を通ろうとしていた二人が踏み潰せる筈もなかった。

一瞬、敗北が見えたものの、未だいける。勝利の女神は最後に微笑む。

このまま竜の後方を掛け、振り向いた瞬間、固形化凝縮魔法液を暴発させればいい。既に鐐の聖刻は取り外し済み。

剣を杖に再び立つ。マールの手も引く。足はガクガクだが、未だ、棒^{デク}になるには早い。

再度、駆ける。

背後では、緩慢な動作で竜は旋回を始めた。

「マールさん、目、瞑って」

マールは目を閉じた。左目だけ。しかし、急^せくレゾンは確認も疎^{おろそ}かに剣を投げた。

剣は放物線を描き、狙い通りに竜の頭部へ。そして、爆ぜた。

ここまでは計算通りだった。

レゾンはマールを抱き^だ抱^かえるように、抑えて、伏せる。

二人の後方で火球が出現。熱はない。純粹に光だけが球状になっている。

竜の咆哮が耳朵を劈く。そこには、苦悶の色が聞き取れる。地面はビリビリ震える。

十秒程間を置くと、レゾンはマールを引いて、又走り出す。竜は尚も唸り続けている。

竜は急性の盲になっ^{めくら}ていている筈だ。法具の光は強力だ。何時間も闇の恐怖に苛まれるがいい。そう、レゾンは勝利を確信し、笑った。が、勝利は幻だった。

再度、突風が二人を包む。

今度は前からではなく、真横。そのまま、二人は吹き飛ばされ、崖に叩き付けられ、間髪入れず、穴に落ちた。運悪く、竜が出産の為に掘った穴倉へ嵌ってしまったのだ。

背骨が硬い岩盤に打たれ、悲鳴を上げる。

女々しい声が自ずと出た。

「うわあああ、ああん」

聖堂騎士たる自分が情けない。そうは思うも、痛みは引かない。痛みで目がシパシパする。鈍痛がやってくる毎に強引に、瞼が閉じる。

確認しなくては、同道者^{ツレ}の安否を。

痛みを堪える。噛み殺し、押し殺す。力み過ぎて奥歯が痛い。歯茎が軋む。

真っ暗だった。

陽光は届いていない。けれども、断崖に囲まれた場所にいた所為か目は直馴染んだ。

手がギリギリで届かない位置に小枝に埋もれて、マールが仰向けに倒れている。横目で確かめる。首は動かない。

レゾンは立とうとした。が、立てない。

全身が言う事を利かない。体からの痛み以外の存在感がない、とも言えた。

背骨を折ってしまっただろうか。だとすれば、ここからもう動けない。

一気に諦観がレゾンの脳内をベタベタと埋めた。

「レズン、いる？」

頭上で声がして、首を動かそうとして、やはり動かせず、さっきまでマールが倒れていた場所を横目で見る。

いない。

彼女は動けるようだった。

打ち所がよかったのか。

そう言えば、マールの倒れていた場所には小枝が山のように積んであった。恐らく、ここは去年かそれ以上前に竜が出産もしくは産卵した場所。小枝の山は巣の後だ。

普通に考えれば小枝の山に落ちるのも危険だろうが、巣の後なら、小枝は全て横に並んでいる筈で枝が刺さると言う心配はない。

レゾンは安堵した。

「何する？」

「う……げっほ」

咽る。その所為で背筋が動き、痛覚が刺激される。

「ううう」

「竜、きみい、いないらば、来ないかた」

ダメだ。解読出来ない。只でさえ、痛みで朦朧としているのに。

「に首の竜、魂、食ふ。私の魂、竜、食わん」

何を言っている？

二首大蛇の事もちゃんと知っているじゃないか。この娘は。

「竜、は、私、怯えふ」

私が怯えるのか、私に竜が怯えるのか――。

「私、半ん死。竜あ、死にだまは食わん」

半死。死に魂は食わない。

あの時、感じた感情と、怨霊魔術師と言う言葉。マールから感じた死臭。点が線で繋がるような思いがした。マールは怨霊魔術師に細工された精神障害者だったのだ。

半死とは恐らく、普通の人間ではなくなってしまったと言う事、二首大蛇が死に魂を食わず――尚且つ、怯える――竜は正常でない魂に怯える、多分、そう言う事。

それなら二首大蛇が中々姿を見せなかったのも頷ける。

少女――マールは、壊れてしまった言語能力でそれを語っている

のだろう。

出来る事なら、もっと早く言って欲しかった、そうも思ったが、強引だったのは自分の方だ。死亡フラグは正しかった……。

彼女もこの儘二首大蛇が出ないかもしれないと思っていたのだろう。

その期待は脆くも果てたが。

マールの顔がレゾンの顔に被さるようにして、やってきて、覗き込む。

レゾンとはある事に今更ながらに気付いた。

マールの額の左側。痛ましい傷跡がある。

今まで気付かなかったのか不思議な位、くっきり、はっきりと。傷は暗がりにも関わらず、色が分かった。赤黒い。そして、痛ましいよりも禍々しいが正しいと思わせるような――何かが刺さった後にも思えた。

何故だろう。闇に傷は浮かび上がるように感じられ、自己主張している。

魅入られて仕舞いそうだった。

マールは美しい顔立ちをしているが、それよりも額の傷が魅力的に見えた。そして、何か底の知れない蠱惑こわく的な物を覚える。

怨霊魔術師の細工跡の筈なのに、憎むべき敵の、悪魔的行為の結果の筈なのに、何故だろう、怨霊魔術師に対する怒りが沸かない。寧ろ、沸き立つのはマールへの得体の知れない恐怖だった。

二章

二・導^{しるべ}残し

骨は折れていなかった。不幸中の幸いと言えた。

しかし、体に負った傷は深く一月は歩けそうもなかった。

レズンは一週間振りの溜息を吐いた。

まさか、自分が生還するとは思わなかった。

目を醒まして、「騎士さま、お目覚めになりましたか？」と可愛いシスターが言った時、一瞬、天国かと思った程だ。

シスターの弁に拠ると、二首大蛇が姿を消したらしく峠は再び往来で溢れているのだと言う。その時、崖下で瀕死のレズンを偶然通りがかった大聖堂の司祭一行が見つけ、救世堂の病院へ連れて来たのだそうだ。

救世堂の優秀なスタッフ、魔術医師と人体医師の手によって一命をとりとめ、今朝方、医師連中が峠を越したと宣言したばかりだと言う。

自力で竜口峠を越える事は出来なかったが、「驚異的な体力だと医師も言っていましたよ」とシスターが言うように、命の峠を越えたのは自分の力だったようだ。

もつとも、救世堂のスタッフが一級と言う事もあるけれども。

只、二首大蛇が姿を消したと言うのが解せなかった。

お役所仕事の帝国府や地方分帝府が救世堂に要請し、討伐軍を出すには一週間は早すぎる。

疑問をベッドの脇で聖典を読みながら、その実、舟を漕いでいるシスターにぶつける。

「二首大蛇、本当に消えたのか？」

「ええ、綺麗さっぱりです」

慌てて目を開け、わたわたしながら、シスターは言った。

「討伐軍か？」

「いいえ、だったら、竜肉が今頃、院内食に出てますよ」
もったもな話だった。

竜肉はとても美味なのだ。一級の眷属の肉ともなれば、精力もつく。

「去ったのか？」

「分かりません。竜が出産や子育てを放棄すると言う話は聞きませんし」

これ又、至極常識的な回答だった。

多分、真面目で実直なシスターなのだろう。なにせ、救世堂病院で働いているのだ。もったも、あの船の漕ぎっぷりは何処か天然もあり得るが。

「誰かが倒した、とは？」

「なら、死体が見つかると思うのですが……」

「死体、搜したのか？ 今の時期、他の竜が邪魔で搜せないと思うが」

「そうですね。街道沿い以外の探索はされていませんね。崖の上にあるかもしれませんが、それは討伐軍のお仕事ですし」

シスターは言いにくそうにしながら、続けた。

「未だ、討伐軍は来てないんですよ」

「そりゃ、竜はもういないんだしな」

「でも、姿がないなら、潜伏しているとか考えませんか？」
少し難詰が含まれている。

「確かに、すまないな、俺のお仲間が」

レゾンの後頭部を掻いた。

「いえ、レゾンさまを責めてもしようがないですよ……。寧ろ、レゾンさまは勇敢に戦われたのでしょうか？」

戦うとは言い過ぎだが、確かに挑戦はした。

「一矢報いようとはしたが――」

「見習って欲しいですよ、本当」

シスターは頬を膨らました。何処か、幼く可愛らしい。

「上層部は貴族連中と抗争している割に帝国政府とは馴れ合っているからな……。まあ、六番分帝以外が枢機卿イスサデルなんだから、当然と言えば当然かもしれないが……」

「だからって、お役所的な仕事しちゃいけませんよ。大聖堂は庶民の味方でない」と

庶民の味方と言った時、やや、シスターの顔が曇る。それを捉え、レズンは笑って誤魔化そうとし、

「はは、そう言えば――」

マールは如何したのだろうか。同じく病院にいるのだろうか？

「俺と一緒にいた少女はどうした？」

「少女？　ですか？　聞いていませんが……」

「マールと言うんだ。貴族っぽかったが、峠を越えるようだったの
で同道したのだが」

「マールさん、ですね？　院長に聞いてみます」

シスターは立ち上がった。今まで掛けていた綺麗な木目の椅子がカタリと音をたてる。

「あつと、シスター……じゃダメだな、名前教えてくれ」

「リフィークリウスです、長いのでリフィーとでも」

「貴族なのか？　敬語でないと不味いか……」

「いえ、元貴族ですよ。他の貴族達は色々、苦勞……しているみたいですが、私は因果応報と思うんです。今までのツケが廻まわって来た、そう思います。私は運よくシスターになる事で難を逃れましたけど、償いはすべきと思うのですよ、だから、今の私は庶民と変わりました。聖堂の格付けでも第十八法徒イタメンカですから、底辺シスターです。敬語は控えてくださいね」

シスター・リフィーは長々と喋った。言いたい事が今まで沢山あったのだろう。

それでも、名を聞かれ、貴族にのみ許された長真名ながまなを答えるのは彼女の意地でもあるのだろう。

「貴族の苦勞か……」

暫くして、シスター・リフィーは病室に戻って来た。

「どうだったか？」

「院長はご存知ないと。他の医者にも聞いたのですが、変な事を言われた方がいて――」

「変な事？」

「はい、魔術医師のランガさんと言う方なのですが、その、レゾンさまに聞きたい事があると」

「その何処が変なんだ？」

「えっとですね、そのマールさんは外法げほうではないか？　と言うんです」

「外法？　まさか、確かに彼女は精神を病んでいたが」

レゾンの発言にリフィーは嫌悪感を露にした。

「精神病者キチですか？」

「ああ、こんな事を言うのもアレなんだが、怨霊魔術師に処置されたような後があった」

「何故、放って置いたのですか！」

リフィーは問い詰めるようにレゾンににじり寄った。

「精神障害者は被害者じゃないか」

「確かに、そうなのですが――」

「俺は正しい事をしたと思う」

「はい……それも分かるのです――すいません、外法と言われたもので、つい」

「それでマールはいるのか、いないのか？」

「いません、恐らく。詳しくは後程、ランガさんが来ますので」

外法。人々は外法を酷く恐れている。

怨霊魔術師の施術は外法とも呼ばれる。

怨霊魔術師の存在が不確定であるにも関わらず、外法と言う言葉は人々に恐怖を抱かせる。シスター・リフィーも外法を見た事も、外法者にあった事もないだろう。それでも、皆怖いのだ。正体不明

だから、尚更に。殊更に。

「分かった。それで、シスター・リフィー」

レゾンは柔和な笑みを作り、

「なんででしょう？」

「きみは俺の下しもの世話もしてくれるのか」

「は、はい？」

突然、真面目な話——これも不真面目な話でもないが——から話題がシフトし、目に見えてリフィーは慌てた。頬を少し朱に染めて、

「なにせ、俺はロクに動けない、ほら」

レゾンは足を動かそうとし、ホンの少し、聖典の半分位浮き上がっただけで、力なくマットに落ちた。

「えっと、すると思い……ます、よ」

「それは嬉しいな。こんな可愛い人に傳かれるとは」
リフィーは下を向く。

「意地の悪い人ですね。握り潰しますよ？」

「はは、シモネタの分かるシスターでよかったよ」

レゾンはさも可笑しそうに笑った。その脇でリフィーは膨れっ面。やや朱が注している為に未熟なトマトに見えない事もなかった。

三章

三・夜明けの市と二人の少女

町は色々な意味で活気が溢れていた。

田舎程治安がよい、と言うのはよく言われる話、そして、真実であり事実だ。

ここ、夜明けの市は一昔前まで治安の悪さで有名だった。歴代の七番分帝の手を焼き、遂には先帝が投げてしまい、市長が絶対権力者になってしまったり、しかも、その市長がゴロツキのリーダーだったりとメチャクチャを絵に描いた町だった。

しかし、捨てる神あれば拾う神ありも又世の慣わしならで、救世堂の聖堂が立ってから町は一変した。

勿論、全く犯罪がないわけではない。圧倒的に少なくなったばかりか、強盗を恐れ、鉄扉が閉じていた商店街も今や大商業区となっている。

人々は口々に言った。

ハムオルカ

司教さまのお陰だと。

司教ラダトが七番分帝であり七枢機卿の一人であるオルディカーンの絶対の信頼を受け、夜明けの市に赴任して来たのは七年前の事だ。

ラダトは先ず布教活動に専念する前に僧兵部隊ザリンで町を制圧した。

当時、チンピラやヤクザ達に脅かされていた人々は、内心喜んだが、報復を恐れ、思ってもない言葉を司教に述べ立てた。

「我々は解放を望まない」

だが、司教は全てを見抜いていた。彼自身、人が恐怖に縛られるプロセスと方法論に熟知していたからだ。

制圧後、布教は始まった。

無料で各家庭に聖典（餌）が配られた。

人々はそこに救いを見出し、求めた。

救世堂の勢力は瞬く間に伸び、無法者達は立場を失った。

そこで、無法者達は貴族に救済を求めた。

当初、貴族達は渋った。

しかし、目の前で宿敵救世堂の力が拡大するのは我慢ならなかった。

貴族とヤクザは手を組んだ。

けれども、これは不味い選択肢に他ならない。只でさえ、臣民を酷使していた貴族への風当たりは日に日に増し、町には暴徒が溢れた。多くは勿論、救世堂信者だった。

全てはラダトとオルディカーンの目論見通りで、それ以外の何物でもなかった。

暴徒と僧兵達は貴族邸に押し入り、貴族達を捕らえ、「処刑を」と叫んだ。

皆が口々に断罪、死の鉄槌を望む。そんな中、司教ラダトは待ったを掛けた。

「死よりも楽しい仕打ちがある」

司教にあらざる言にも関わらず、人々は司教の二の句を待った。

人々は熱病に罹ったように憤慨していた為に正義を誤謬しびちゅうしていた、といってもいいかもしれない。

「彼らを飼い慣らそうではないか」

そう、司教は述べた。

人々は司教の真意が汲めず、首を傾げ、一人の市民が聞く。

「飼い慣らすとは？ 如何な事で？」
と。

「文字通りだ」

司教は汚らしい笑みを浮かべ、言った。しかし、残念な事に市民にはそれが救いの顔にしか見えなかった。

「いっらしゃい、お嬢さん」

店先で呼び込みをしていたウェイトレスは店の入口を潜った客に営業スマイルを感じさせない満点の笑顔を向けて、言う。

客は銀髪を揺らしながら、まるで意に介さず、早足でその儘入店した。

店のカウンターの時から、客の影を目に留め、オーナー兼ウェイターが外の呼び込み嬢と同じく、「いっらしゃい」と言う。只、こちらは営業スマイルなのが丸分かりだ。

銀髪の客は声の方を向き、機械のような動作でオーナーもとへと歩み寄る。カウンターを挟み、相対し、

「ご注文ですか？」

と訊くオーナーに、

「注文、前、に」

と言った。

店の他の客が煩く、よく聞き取れない声量だったが取り敢えず、オーナーは心の中で『日替わりメニュー』は採算が悪いんだ、選ばないでくれと願いつつメニューを開き、見せた。

「何になさいます？」

しかし、オーナーの注文取りを無視し、客は腰に縫い付けられたポケットから何かを取り出す。ポケットは元々、服に備わっていないかったのだろう、取って付けたように不自然で、黒のワンピースにも関わらず白の糸で縫い付けがある。そして、そもそもポケットが歪んだ星型なのは妙で、多分、裁縫の苦手な人物か手先の不自由な――ぶきっちょが手掛けた事が見ただけで瞭然だ。

客はオーナーに取り出した物を見せた。

「なんでしよう？」

オーナーは変な客だ、と思ったが、おくびにも出さない。客商売をしている身だ、きちんと弁えている。

「知る？」

「知る？」

オーナーは鸚鵡返しに聞き返す。そして、客の指し示す物に目を向ける。

客の出した物は端の破けた紙で、年季の入り具合を体現するように、しわくちゃ、が、注視すべきはそこではなく、紙には似顔絵が描いてあった。

この似顔絵の人物を知っているか？　そう客は訊いているのだらう。

オーナーは困惑した。

知らなかったからではない。知っていないとおかしいから困惑したのだ。

似顔絵の人物はラダト司教だった。

やや、現在より若い印象があるが、間違いなく司教その人だ。

への字に曲がった特徴的な眉と骨格が変なのではないか、と疑いとなる程突き出た顎。そして、司教にはとんと似つかわしくない獅子のような目付。

こんな印象的な人物を忘れる人はそうそういまい。それに、夜明けの市市民であるなら、このユニークな顔に毎日触れている筈なのだ。夜明けの市市民権を持つ人々の家には、一家に一つ魔術投影箱カメラに因る御真影がある。

旅人だろうか？　それにしても目の前にいるのは十八歳前後の幸薄そうな少女だ。何処か高貴な色を帯びていて、深い海の底を連想するエメラルドの目、銀糸のような髪、そして、何とは言っても美人。とても、旅人には見えない。

貴族？　市場から逃げてきたのだろうか？　一瞬、そう思ったが、もしそうなら、食堂でチンタラしていないでさっさと町から離れる筈だ。

「知っていますとも」

考えを保留にして、オーナーは答えた。

「誰？　どっちの人？」

どうやら、客は頭が弱いらしい。『どっちの人』ではなく『この人』がこの場合、正しい筈だ。そんな事、堂学校しか出ていない貧民、無学の乞食でも知っている。オーナーはこの結論に満足し、さっさと終わらせる事にした。

「司教さまだよ、この夜明けの市市聖堂の」
セテセダテ

思わず、言葉も等閑になってしまう。しかし、オーナーは言い直さなかった。

「シ、聖堂？」

「町の中央にあるでしょう、あれ」

「町、の、ちいう央……」

客は無表情に復唱——きちんと発音出来てはいないが——して、頷く。

「分かった、見、みつた」

話は終わった。オーナーは少女から目を離そうとし、

「これ、欲しい」

少女は「待つ」とオーナーを呼びとめ、メニューの隅っこの『竜の唐揚』と言う文字を指で示す。

「お金あるの？」

少女は又頷く。その姿を訝りながら、オーナーは見届ける。

先の似顔絵をポケットにしまい、同時にポケットから銀貨を三枚取り出す。

「足りう？」

足りるなんてものじゃなかった。全然、お釣りが来る。なにせ、銀貨は銀貨でも銀の含有量が高く、良貨と言われる十八代六番分帝銀貨、通称、マテシニ。そして、そもそも、『竜の唐揚』の値段なんて高が知れている。上級眷属の竜肉ならいざしらず、そんな物を一食堂が出せる筈もない。

瞬間、オーナーの脳裏に悪魔が囁く。

頭の弱い少女にマテシニ銀貨三枚で『竜の唐揚』を売れ、と。

しかし、彼は肝心な部分で真面目だった。直に接客モードに自分

を戻し、

「ええ、十分ですとも、銅貨二枚で十分ですから」

けれども、きちんと値段を言ったにも関わらず、銀髪の客は銀貨三枚を出す。

オーナーは銀貨二枚を押し戻し、釣り銭箱から銅貨を数枚掴んで銀髪の客に握らせた。

「足りるた？」

「はい、では、あちらの席でどうぞ。あと、ドリンクをサービスしますね」

不埒な事を一瞬でも考えた事への罪悪感から、オーナーは付け足すように言った。

「あいごと」

客はウェイトレスに誘われ、窓際の一人席に座る。

「でい丈夫だつ、かな」

銀髪の客――マールは窓越しに町を見る。少し遠い目。

すると丁度、先程情報を得た市聖堂らしき物が目に入った。

白く荘厳な雰囲気、聖堂は、周りの建物より一際大きく、尊大な雰囲気を持ち、立っている。ここは、俺の町、そう嘯うそいているようだ。

「やと、大きいのに会えた。きみい、六人ん目え」

市聖堂を握り潰す動作をマールはする。

カリカリと硝子窓が鳴る。思わず、窓に爪を立てていたようだ。

「お客さん、お待たせしました」

笑顔一杯のウェイトレスが盆に載せた『竜の唐揚』とアイスティーをテーブルに並べた。

「以上ですね」

「うん」

マールは小さく首肯した。

その時、ふわりと揺れた前髪の隙間から覗く傷跡をウェイトレスは見てしまった。

訳もなくウェイトレスは恐ろしさに、かしめ取られる自分を感じ、足早に去る。

そして、盆を取り落とし、床に落ちた盆が盛大な音をだし、五月^ガ蠅^ナり立てた。

一斉に客が注視する中、一人、見向きもしない客――マールはアイステイーにストローを差込ながら、ずっと窓の外を見ていた。死人のような顔で。

――

ジメジメする。

キモチワルイ。

泣きそう、吐きそう、死にたい。

如何してこんな事をするのだろう、幾ら考えても答えが出ない。あんなに笑顔で迎えてくれたのに、その背後に悪魔がいたなんて、そんな事分かる筈ない。

何でかな、何でだろう、如何して、如何して。

何回も繰り返して来た『如何して』を今日もイダサは繰り返す。取り留めがない、考えたって、子供の頭じゃきつと分からない。だけど、じゃあ、誰か答えを教えて欲しい。

でも、教えてくれない。父母はもういない。あの人達は答えない。鞭打つだけ、卑猥な笑みを浮かべるだけ、よく分からない話をするだけ。

だから、考える。堂々巡りでも考える。

薄っすら判っている事もあるけど、それらは考えたくない。

だって、怖い。怖い。

深く考えてしまうと、分からないのに答えが出てしまいそうで――

「新入りだ」

ドサっと言う音、何かが投げ込まれた。格子扉の閉まる音、続いて施錠される音。キッチンと言う金属音が暗く陰鬱な室内に木霊する。「痛い……」

ドサっの主が口を開いた。

「あいつら、許さん」

ガバッと音のしそうな動きで発言者は顔をあげ、体を起こし、身を叩く。着ているドレスは白を基調にしている所為で、泥や汚れは落ちず、チッと舌打ち。

「汚い場所……あいつらの性根そのまんま、ん？ あんたは？」

新入りは部屋の奥で蹲る少女を見つけ、声を掛けた。発言だけからではなく、声色からも何処か高飛車な印象を聞く者に与える。

しかし、不快より頼もしい感じもしないではない。

「私……」

少女は顔を上げて、生気の抜けた目で新入りを見る。

「そう、あんた」

「古株、って言ったら駄目？」

「駄目。私は悲観論は受け付けない」

堂々と言い放つ。余りに堂々としていて、眩しい位だ。

「私はクラヤシャン・イ・クァンスケルプトラ・イム・ハシユバイクニトーマ、貴族」

「えっと、私はイダサ」

戸惑うように、答えた。

「何時からここにいろの？」

クラヤシャンはイダサに問う。何時の間にか、イダサの隣に座っている。さっきはドレスの汚れを気にしていたようだったが、もう、如何でもよくなったのか、湿気で青カビの生えた床に平気で腰を据えている。

「先週かな？」

「そう。なら、そろそろね」

イダサの顔が歪む。今にも泣きそうな程歪に。

クラヤシャンは焦る。確かにブラックとかそう言うレベル、もとい、ジョークですらない。

「な、泣くな。泣いちゃ駄目、そういう事はあいつらを喜ばす」

断として宣言するように、イダサの両肩に手を置き、真摯な眼差しで彼女を見つめ、言った。

「うん、分かってる。昨日も一人、いなくなった」

「全く、何が庶民の味方だ、悪魔の手先め」

クラヤシャンは犬歯を露に吐き捨てる。ギチと奥歯が擦れ合う音も噛み合わさった歯列より漏れ出る。そこには、禍々しい程の憎悪が滲んでいる。隠す気もとんと感じられない憎悪は、それ故に簡単に空気に浸透し、その深さをイダサに知らしめた。

「うん、悪魔だよな」

言ってから、あははと他人事のようにイダサは笑った。マリオネツトみたいな少し不気味な笑い方。不憫に思い、クラヤは言う。

「えっと、でもね、安心して。助けは来るから」

「ほんと？」

イダサは身を乗り出す。表情が一気に華やいで、クラヤシャンの顔面スレスレに自分の顔を寄せ、「近い」と言われ、引き下がる。

「そう、この司教、何者か知ってる？」

この司教、ラダト司教、夜明けの市の市長にして市聖堂の支配ラデル。町をゴロツキと貴族から開放した人物。昔——そんなに遠くない過去だけれど、家に御真影があったのを覚えている。目付の悪いコメディアンと言った風貌の。

「救世主？」

「バ、つかじゃないの？」

色めき立って、クラヤシャンは拳で床を打つ。余り強く叩き過ぎて、痛そうに柳眉を曲げ、青カビの付いてしまった手をドレスに擦なすり付ける。もう、殆どドレスは白さを失ってしまった。

「奴隷商人よ、しかも元じゃなくて、現役」

「え？」

「もしかして、知らない？」

驚いてクラヤ。

「うん、知らない」

「幾つ？ 歳」

「十一」

そっかぁと感慨深く言い、何かに同意すると謂わんばかりに首肯し、

「私は十二、ま、私も七年前の事なんて伝聞でしか知らないんだけどね。で、あんたが言った悪魔って誰の事？」

「叔父さんと叔母さん、そして私を買った人、これから買ってく人」
悲しさ、寂しさ、憎しみとない交ぜになった寂寞の想いが微かに
イダサの声と面から匂った。

「半分正解、それらの元締めがラダト司教って事」

人差し指を小さくメトロノームにしながら、クラヤは言った。

それに対して、イダサは目を開けて、分かりやすい驚きを示す。
驚き顔がさぞおかしかったのか、クラヤシャンは噴出した。唾が
飛散し、飛沫に変わる。

「あははは、マジなんだ。でも、大人は知ってるだろうなあ。汚い
からね、ここみたいに」

「そうなんだ、知らなかった。酷いよ、皆」

「そうだね」

クラヤシャンはイダサの頭の天辺を撫でた。

一週間風呂にも入っていない所為か、フケがぶわっと舞う。

「わ、汚なっ」

「クラヤも酷い」

さつきとは打って変わって、酷いに本当の恨み節は見えない。冗
談のレスポンスに思える。

「冗談。私は良識的貴族なの、そもそも、あいつら悪魔をのさばら
せたのは、私らにも責任があるんだよ。臣民を酷使して来たのが悪
い。」

確かに、救世堂が来た町は発展する。でも、それはあいつらが税金を取らないから。

じゃあ、善なのって言えば違う、天上皇帝が未だ堂主に奪われてなかった頃は、奴隷制はなかった。朝三暮四ってヤツだよ、何かを与え、そして喜ばす、代わりに何かを奪う。

あいつらは、神のヒエラルキーとか呼んでるけど、それで、奴隷制を正当化してるけど、だから、何？　って感じ。

何時神から神託を得たの？

聖典って誰が書いたの？

古い帝国の神々は何処へ行つたの？

あいつらは偽善者ですらない、だから、私は偽悪になっても、あいつらを滅ぼす、そう決めてる」

イダサは余りのクラヤの長口上^{ながこうじょう}にぽかんと口を開け、

「難しくて分かんない、歳一つしか変わらないのに凄いね、クラヤ凄い」

他意のない賞賛になれていないのか、それとも貴族として当たり前前の事と自分が思っている事を褒められたからか、照れくさそうにはにかんだ。

「ありがと、クラヤって呼んでくれて」

そして、何故か違う点にお礼を言う。

「うん、でもクラヤは何でここに？」

「ううん、話すと長いよ？」

かったるさを難しげに歪む唇が語る。

「いいよ」

「私、持論を言うのは好きだけど、経験とかプロセスを云々するのはね」

面倒そうに、ロングヘア^{もてあそ}を弄ぶ。長髪故に吸い込まれていた部屋埃とカビが追い出される。そして、「えー、もうこんなに汚れる？」と不満顔になる。

「助け、来るんでしょう？」

「うん、来る。だからさ、もっと明るい話をしよう」

「それがいいね」

屈託なくイダサは笑む。その笑顔をクラヤはガン見し、

「うぬう、食べたくなるね」

舌なめずりを一つ。

「私？」

「そう、食べちゃいたい」

「食べないでね」

ワザとらしく、後退^{ずさ}るイダサ。

「食べないよ、友達だから」

「ほんと？」

「うん、ほら、貴族って言う^{みな}と皆厭^{あだな}な顔するでしょう？ あんた、

全然しなかったし、いきなり、渾名^{あだな}で呼ぶし」

「私、馴れ馴れしいんだ。それに、ずっとここに押し込められて、
最初の人達もいなくなつて——」

「はい、泣くな！」

「うん、泣かない。クラヤ楽しいし」

「楽しいのはあんただと思うけどね……」

「う……ん」

結局、堪えきれず泣き出すイダサ。少女の瞳は泪で瞬く間に埋まり、洪水のように溢れ出す。

暫し、困った顔をするもクラヤは煤けて湿っぽいイダサを躊躇なく抱き締めた。

「クラヤ、強い……ね」

「当たり前、貴族だから。って嘘、余裕ぶっこいてるだけ、助けが来るって知ってるから」

「——うん」

イダサは一頻^{ひとしき}り、クラヤの胸で泣いた。未だ、十二歳の少女の胸は小さかったが、イダサは母親を思い出した。自分と同じ位の歳の少女にそんな思いを抱くのは変だと思ったが、それも泪と共に露と

消えた。嗚咽はなくサメザメとした泪だった。

四章

四・市聖堂地下室

「生きがいいよお、拔群だあ」

右手に鎖を持った男が言う。

鎖の先には首輪が付いていて、首輪には少女が繋がれている。

顔を沈鬱に歪め、道行く人々や自分の前に群る男達を白昼夢の中にいるような目で見る。

「何処が拔群なのかな？」

一人の身形の良い紳士が歩み寄り、男に訊く。

卑猥な笑みを浮かべつつ。

「そりゃ、お客さん、決ってますがね」

「おいおい、まさか、確かめたとは言わないよな」

男は仕舞ったと言う顔になる。

間髪入れず、紳士、

「そいつは、ユーズド扱いになっちまわんか？」

「いえいえ、まさかまさか、確かめるなんて」

「この手の娘は分らんからなあ。ここに来る前に既にガバガバだったら、目も当てれん」

やれやれと紳士。

すると、別の紳士が落胆する紳士に言う。

「あなた、使いますよ？」

「使います？」

「ほら、見てください」

少女の腕を掴み、

「丁度良く締まってる。いい筋肉です。この筋肉の付き方からすると、何か全身を使う競技をしていたのでしょう」

そして、今度は少女の腹を指し、

「腹筋もいい感じだ。確かに、エロスは足りない。が、顔もいい。食べるには中々美味そうだと思いますか？」

最初の紳士は少し引きつつ、

「あんた、本当に食べる人か」

「そうですよ。少女の肉はいい、勿論、肉褓も美味い」

「どっちの意味だい？」

「両方ですよ。臭みを取るのもそうですが、犯すのは調理の一環ですからね」

「ははは、いい事を言う。精神病院にでも行って来るといい」
茶化すように最初の紳士。

「残念ですが、アレらは飽きましたよ」

「飽きた？」

「院長をしてましてね」

「ほう、それは羨ましい。キチガイの嬌声や哀願も聞いてみたいモノだ」

「ご所望でしたら、今度来ませんか？　うちに」

「いいね、勿論、いい女なのだろうね？」

「それは保障しかねますな」

はははは。

紳士達は笑う。楽しそうに、淫靡に。

「それでだ、確かめていいかな？」

紳士二人は鎖を持つ男に向き直り、言う。

「ええ、どうぞ、どうぞ」

市聖堂前にはとても、神を売り物にし、美辞麗句で綴られた聖典の施設の近くとは思えない光景が広がっている。

裸の女と裸の男が鎖に繋がれ、並べられている。

彼らにはまるで商品のように、値札が付き、値札がないものは近

くで競が行われている。

ここは、奴隷市だった。

「うう……」

マールはその光景を見ないように通りの反対側を見るが、結果は同じだった。仕方なく、前を向く。市聖堂へ行くには通らねばならない、しょうがない事だった。

頭を抱える。

頭痛がする。

胃がピリピリする。

「嬢ちゃん」

呼ばれた。

「嬢ちゃん、夜のお供はいらないか？」

奴隷商の一人がマールに言う。首を横に振る。

「そうか……」

残念そうに奴隷商は引き下がる。

何人かの呼び込みに首を振り、進んで行くと、『貴族同盟』と言う単語が目に入った。

その後の語句を追う。

——の盟主の娘、明日ここシャボン商会が競を執り行います。協賛司教さま——。

目玉商品なのだろう、多くの人々が足を泊めている。

「めい、主……」

張り出しの前で一人の紳士が言う。

「これで、貴族も終りだなあ」

「救世堂に逆らうからですよ」

答えたのは聖職者の格好をしている。

ますます、頭痛が襲い、マールは早足に市聖堂の入り口を目指した。

やっとの事で辿り着いた市聖堂の中は余り人がいなかった。

外の活気が嘘のように静かだ。

正面には巨大なアイコンが鎮座し、天井も幾つものテンペラが彩り、所々に設えられたステンドグラスの窓から色とりどりの光が舞い込み、赤い絨毯の引かれた床と整然と並んだ木の椅子を照らしている。壁も柱の大理石も白く、汚れ一つない。

余りに綺麗なので、却って不気味な雰囲気を感じ出している。

マールがきよころきよろしていた所為か、副支配の格好をした男がやってきた。

「いい絵でしょう。それと、何か御用ですか？」

マールは丁度、アイコンの真下にいる所だった。

アイコンを見ていた、と言えば、そう通るだろう。

もっとも、マールはアイコンを見ていた訳ではないのだが……。

「用、有うよ」

副支配は少し嫌な顔をする。

「……何でしょう？」

「何ない」

「？」

「いい、きみはいい」

会話が噛みあわない。そもそも、副支配にはマールの言っている意味が取れない。

副支配は取り繕う風もなく、言う。

「精神のおかしい人に聖堂は慈悲を与えません」

副支配は僧兵を呼ぼうとし、考え直すように踏み留まる。

よく見れば、美人だ。年の頃から言えば、美少女と言った方がいいのか？

副支配の中にいい考えが浮かぶ。

「そうですね、お嬢さん、こちらへ」

言うが早いのか、副支配はマールの手を取る。

「あうと？」

「こちらにいい物があります」

「いい物お？」

副支配はほくそ笑む。心の中でガッツポーズ。

「そうです、とてもいい物です」

副支配はマールを引いた儘、聖堂の右手へ向かう。

小さな部屋に着く。

部屋の端っこの本棚の隅を何やら弄り、

ガガガガ。

部屋を震わす振動音がやって来て、それと同時に部屋の四方の壁の一つがせり上がる。

「こちらです」

現れた通路に進む。

通路は下がり階段になっていて、両脇には蝋燭台が設置してある。二人が通るごとに、今まで密封されていた空気が動き、蝋燭の灯が揺らめく。

会話はなく、かつんかつんとマールの履く木靴が石の階段を打ち鳴らす音だけが反響している。

どれ位下がったか、階段は途切れ、天井の高い部屋が現れる。

中央には大きなガス灯が一つ。

ガス灯の灯に照らされて、二人以外の影。

「レテユルさま、どうなされました？」

影が言う。

「何ぁに。新しいブツだよ」

くいくいと繋いでいない左手の親指でマールを指し示す。

影はしげしげとマールを見て、

「高く売れそうですね、レテユルさま」
と言う。

「まあ、買手に因るだろうな」

副支配——レテユルは頭を掻く。

「何故です？」

「気狂いかもしれんからな、これ」

「ああ……」

得心したように影は頷く。

「まあ、その所はお前が確かめてくれよ」

「了解しました」

卑猥な笑みを浮かべる二人。

「うむ。任せたぞ。後、高く売れた時は、私の推薦だと司教に言えよ」

「分かっております」

「じゃあな」

「はい」

――

「ほら、又新しいのだ」

地下牢に新しいのが放り込まれた。

放り込まれた人物は特に痛がりもせず、声も上げる事なく、そして、起き上がらない。

絶望に我を忘れたのか。

「それから、そっちの小娘。お前は夕刻、出番だぞ」

放り投げた男は笑いながら言った。

「さっさと行け、ゴミクズ」

クラヤは歯をギリギリならし威嚇した。が、少女の威嚇にビビる大人などいない。

「今日……私……」

イダサが震える。

クラヤは新入りは放って置く事にしイダサを宥めた。

「大丈夫、パパが来るから……」

しかし、語尾は尻窄む。

なぜなら、クラヤのパパが助けにくるのは少なくとも明日、長く見て、三日後。

イダサは売られてしまう。誰か知らないクソみたいなヤツに。
「くそう」

泣き出したくなるのをクラヤは堪えた。ここで、自分が泣いてしまつては意味がない。

「うわああああああ、私売られるんだあ」

「だい、丈夫」

新入りが言う。

「なんでさ！」

クラヤが詰め寄る。

新入り——マールはゆっくりした落ち着いた動作で身を起こす。

「だい、丈夫」

繰返す。

「だから！」

「だい——」

「なんでだつて訊いてるんだよ！ 会話になってない！」

いきり立って、クラヤは足を忙しく動かす。

イライラする。大丈夫じゃないのを知っている、折角、友達になつて、大丈夫だと助けてくれるって、パパが来てくれるからって、言ったのに！ それが壊れちゃって、なのに、無責任な事をこいつは言う！

憤怒は加速して、クラヤは言ってしまった。

「大丈夫じゃないんだよ！ 夕方なんて早すぎるんだよ！ パパは来れないんだよ！」

罵っているのに、相手は表情一つ変えない。

それどころか、何を見ているのか判然としない目付。

変なヤツだ。なんで、大丈夫なんて言えるんだ。

益々、怒りが募り——。

今言つた事を反芻しクラヤは、ハットした。

イダサがぼかんと見ている。

「只の慰めだったんだ」

しょぼしょぼと言う。

「違う、違うよ、でも、そう言わないと、言わないと——」
狼狽するクラヤ。取り繕う。

そのやり取りをしげしげとマールは見ている。

そして、やおら動き出し、牢の格子をガチガチ揺らした。
金属の擦れ合う音にイダサの啜り泣きすすが混じる。

「くそう、くそう」

クラヤの眦に泪が光る。

泣くな、泣くな、お前は貴族、プライドを持て！ 心で言い続ける。

「外がいこ——ダメ……」

何かをぶつぶつ言い始めるマール。

独り言なのに、まるで誰かと会話しているよう。不気味だった。
クラヤは耳を澄ます。

外がいこ？ ガイコ？

「な、い。半分、で、行く」

決断したとばかりにマールは拳を握り、錠前を叩いた。
ガキヤ。

鈍い音を立てて錠前が外れ、横木が穴に残り、ぶらぶら揺れる。
それを叩き落す。床に金属音が響き、狭い地下廊下にエコーを刻む。

「行きますよ、お嬢ちゃん達」

さつきとはうって変わって、感情豊かにマールは言った。

余りの豹変振りにクラヤは驚く。

そして、そもそも錠前を叩き壊した事も驚嘆すべき事。

「何をしたんだ！」

「だから、大丈夫だって言ったでしょう？」

「うん」

頷くしかなかった。

「行くよ、イダサ」

事の進みがいまいち理解出来ていないイダサの手を引く。

三人は地下牢を出る。

暗く湿った廊下が広がっている。

壁に燭台、そして、蠟燭。

赤い光に照らされて、クラヤとイダサは見た。

マールの手の甲から僅かに白い骨が飛び出している。

「ケガしたの？ あんな事するから」

でも、血は出ていない。不思議な話だ。

「これ？ これがミソですよ、お嬢ちゃん」

「お嬢ちゃんじゃなくて、クラヤシャン、そして、こっちはイダサ」
びくつくイダサを指す。

「じゃあ、クラヤって呼びましょう」

「あんたの名前は？」

「秘密です。私は有資格者にしか言わない事にしてるんですよ、只、マールって呼んでもいいですけどね？」

「秘密？ 本名って事」

「そう言う事です。さて、敵が来ました。派手に音立てすぎましたね」

クラヤは手の甲の事をもっと聞きたかったが、それ所ではない。

足音が前後からする。

看守が来たのだ。

どうする？ 逃げれるのか？

自分は牢に戻っていれば、殺される事はない。でも――。

「何処に逃げるの！」

足音が迫り、損得勘定に埋もれ、クラヤは訊く。

「ふふ、逃げませんよ」

マールは悪魔のように笑んだ。

五章

五・脱出の道

強かった。滅茶苦茶強かった。

クラヤは恍惚としてマールを見ていた。

隣でイダサはビクビク震えていたが、彼女の震える理由がよく分からなかった。

救世主だ、彼女は。

奴隸市で一段高い見せ台に並ばされるのを阻止してくれたのだ。

勿論、彼女自身が逃げる為だろう。

でも、それはおかしい。こんなに強いなら、どうして捕まったのか。理由が判らない。

「怖い……」

「なんでさ？」

呟くように言う。

「だって、あの手。それに、鉄を壊せるなんて……人間じゃないよ人間じゃない——」

そうかもしれない。何かしらの法具かもしれない。

確かに不気味だ、でもそんな事余り関係ない。

目の前で、屈強な男達が女の細腕にボコボコにされていく様は爽快じゃないか。

「でも、イダサ。あんたを助けてくれたんだよ。結果的に」

「うん、けど——」

納得いかないと言う風に言い淀み、泪の筋が分かる頬を震わせる。あつという間に敵は片付く。

「ふむ、奴隸を叩く棒ですか」

マールは一人の看守が持っていたカシの棍棒を取り上げる。もう動いている相手はいない。

さすがに死んではいないだろう。白目を剥いてはいるが。

「昇りますよ」

マールはすたすたと先へゆく。

階段。昇る。

足音が静かな螺旋階段に響く。

「姉ちゃん」

クラヤはマールを呼んだ。

「何？」

「なんで、そんな強いのに捕まったの？」

「色々あるんですよ。只、あなたたちを救えてよかったですよ。多分、上の階には他の人達もいるでしょうね」

マールの言う通り、階段を上がり切った先には牢が並び、これから市に出されるであろう奴隷達が収監されている。

奴隷達は看守とは違うマールと、逃げ出したとは思えないクラヤ達を見て、口々に助けを乞う。

マールは一つ一つ錠前を壊した。

奴隷達はお礼も言わず、解放されると一目散に逃げて行った。

廊下の一番端の奴隷が解放された。

そして、クラヤはそのまま階段を更に昇ろうとする。

しかし、制止された。

「駄目ですよ。このまま上にいっても、ゴチャゴチャしています」

「なんで、またぶちのめせばいいじゃない？」

「そりゃ、そうですね。今、何人解放しました？ 廊下は渋滞ですね。関係者通路を使いましょう」

「場所なんて分かるの？」

「今から探すんですよ」

言って、マールは壁を手で探る。隠しスイッチでも探しているのだろう。

「未だ？」

クラヤは訊く。答えはない。

真剣に探しているようだ。

五分位たっただろうか、未だ見つからない。

ヒマなので、クラヤはイダサと何か話そうと隣を向き――。

「イダサ！」

「ふん、賊が一体何処から入った？」

一人の男が立っていた。

イダサを左小脇に抱えている。

「おい、その女。お前だな？」

マールが男の方を振り向く。

「法具ですか？」

マールは答えず、男の右手を見た。

斧の形状をした法具。法具と判然としているのは、石突に聖刻の刻まれた結晶が光っているからだ。

「その棒を捨てな。さもないと、この子等がどうなってもしらんぞ。司教さまが言うには重要な品じゃそうじゃないか。お前もそれ狙いのだろう？」

「さあ、知りませんね。只、あなたには借りがありましたね」

マールが男の方を向く。

灯でお互いの顔がはっきり分かるようになる。

「お前は、さっきレテユルさまが連れてきた。あの時は無抵抗だったのになあ」

「ええ、実に口惜しかったですね。色々と確かめましたしね」

「気狂いのフリして潜入とはな」

「ふふ、私は気狂いですよ」

「じゃあ、好きなだけ殺してやる。美人を殺すのと犯すのは最高だからな」

男は斧を振り上げる。

何かをする気だ。クラヤは男にタックルをかます。

しかし、意味なぞなく、簡単に跳ね返され、背を床で強かに打った。そして、気を失う。

その隙を突き、マールが突撃して来ていた。

が、男が斧を振り下ろすと、マールは転倒した。

「七級法具転足。なかなかだろう？」

「ええ」

転んだマールに歩み寄る男。

イダサは叫ぶ。

「ややめて！」

ザリュ！

血飛沫が舞う。

暗がり血が絵を描く。

血を流し、倒れる――男。

「な、なんだ……」

疑問を漏らしながら、頭から床に落ちた。

その体の胸の辺りにぽっかりと穴。

そして、男の胸に風穴を開けたのは――この場に一人しかいない。

マールだ。

彼女の手の甲から骨が伸びている。

さっきまでと違い、手の甲から僅かに出ていると言うレベルではない。

一本の巨大な骨の指が突き出している。

手の甲には先程と同じく、四つの骨の突起も残っている。ここからも生えるのだろう。

気味が悪かった。

が、何故かイダサの嫌悪はマールのそれではなく、浴びてしまった男の血に向けられていた。

余りに気持ち悪くて、イダサは失神した。

レテユルは焦っていた。

賊が地下室に出たとの報を聞いたからだ。

賊は地下牢看守を振り切り、逃亡中だと言う。しかも、法具まで持ち出した看守長が帰ってこない。

どうしたものか？　そう思い、聖堂をうろついていたレテウルだったが、見覚えのある顔、しかもさつき見たばかりの顔を見つけ、顔を向けた。

数時間前に地下牢に送った美少女。

しかも、両脇に子供を抱えている。

「あれ、さつきのお嬢さんではないですか？　何処へ？」

賊が逃がしたのだろう、そう思い、レテウルはマールに歩み寄った。柔和な笑みを消さず、好青年、市聖堂の信心深い副支配を装って。

「戻りましょう」

「地下牢へ戻りなさいと？」

てつきり、この気狂いの女は、言う事を聞くとレテウルは踏んでいた。しかし、違った。精神障害者とは思えぬ判然とした回答。しかも、明らかな拒否の顔を浮かべ、こちらを嘲笑する微笑を浮かべている。

面食らった。

「へ？」

何だ。ちゃんと、喋っている？

「それは出来ない相談ですね」

マールは静かにそう言い。抱えていたイダサとクラヤを静かに床に下ろすと、レテウルに歩み寄る。賊の報を受け、慌しくなっている大聖堂の主力は逃げた奴隷の確保に向っていた。この場所にはレテウル一人しかいなかった。

だから、レテウルは助けを呼ぼうにも呼べなかった。

マールがつかつかと歩み寄り、言い知れぬ恐怖を感じても、何も出来ず突っ立っていた。

マールは右手を軽く引き、レテウルの臍を抉るような一撃を浴

びせた。

レテュルは昏倒し、床に崩れ落ちた。

「お姉ちゃん、ここは？」

自然に親しみ深い呼び方をイダサはしていた。

お姉ちゃん――マールはイダサの脇の肘掛椅子に座っていて、呼ばれて振り向く。

「ホテルですよ。安心していいですよ。かなり、郊外まで来てますから」

イダサはクラヤはどうしたのだろう？　と思い、辺りを見回す。すると、丁度隣のベッドでクラヤも目を醒ました所だった。

目が合う。

「脱出出来たんだ。ま、当たり前か。でも、びっくりだ。姉ちゃん、法具持っていないでしょう？」

「そうですね」

「なのに、法具使いに勝ったんだ」

「うん、一撃。ちょっと不気味だったけど」

イダサが嬉しそうに答える。

「それで、町の外に親戚とかいる？　路銀なら、ここにある」

マールは、ポケットから銀貨を取り出す。

が、クラヤは制止した。

「私は不要。あさってまでここがバレなければいい。イダサは？」

「私は……。誰もいない」

悲しそうに言う。

「お姉ちゃん、一緒にいれないですか？」

「それは無理ですね。諸般の事情にて」

きっぱり断るマール。

「ですか……」

「イダサ、身寄りがいないの？」

無言で首を縦に振る。

「なら、私の妹になりなよ」

「え？」

鳩が豆鉄砲を食らった然とするイダサ。

「大丈夫。一人位増えてもなんて事ないよ。うち」

「ほんとうに？」

「ほんとう」

クラヤの顔に嘘はなかった。

そう言えばとイダサは思う。

クラヤは高そうな純白ドレスを着ていた。貴族とも言った。

妹になる。それは貴族になる事。

夜明けの市に暮すイダサにとって貴族は悪だと教えられてきた。

暫し逡巡する。

でも、クラヤは悪い人には見えない。

寧ろ、自分を励ましてくれたし、臆面もなく妹になりなよと言う

位の好人物。

少しの迷いも馬鹿らしい気もした。

「お願い」

「うし。じゃ、無事。パパが来たら頼み込む。意地でも」

クラヤは胸を張った。

「だから、姉ちゃん。三日間、護衛してくれない？ お金なら出すよ」

「そうですね。でも、それも出来ません」

「そっか」

「じゃあ。二人とも目覚めた所で、少しシャワー浴びてきます」

マールは立ち上がり、隣部屋のシャワールームへ消える。

「ねえ、イダサ。あの姉ちゃんの事気にならない？」

「うん、少し」

「じゃあ。ちょっと、衣装漁りでもしようか」

「いいの？」

「いいの、いいの」

言うが早いのか、クラヤは脱衣室へ忍び込む。

マールの着けていた黒のワンピースが無造作に脱ぎ捨てある。
シャワーの音が聞える。

歪な星型ポケットをクラヤは探った。

紙。

手紙のようなものが入っていた。

習作なのか、何枚も同じ物が入っている。

「何？　これ……」

内容を読んで、クラヤは言葉を無くした。

六章

六、指令を受けて

全治一ヶ月と言われていた怪我も何の事はなく、レズンはその馬鹿体力にモノを謂わせ、たった一週間で完治してしまった。

そんな、レズンを見て、介抱役だったリフィーはやれやれと肩を燻らしながら、「すごいですね」と褒めた。その言葉のみを捉えるなら、賞賛なのだが、しかし、目と口元が褒めていなかった事は言うまでもない。

所で、少し、話を戻そう。話は、レズンが入院した初日に戻る。

――

聖堂病院にレズンが収容されて最初の日、リフィーの言ったランガと言う魔術医師が午後になってから、レズンの元を訪れた。

入室して椅子に腰を据えるなり、レズンに、ランガは「骨だ」と言った。

話の先が読めないどころか、一体何について話しているのかすら、全くもって不明瞭で、レズンは只、「骨、ですか?」としか答えられなかった。

「骨だ」

もう一度、ランガは言う。

「これを見ろといい」

そう言って、ランガは白衣のポケットから、人の小指程の白い物、白骨化した骨だ――を取り出す。しかも、丁寧に右手に白手袋をして、掴み、更に骨そのものも紙で包んである。紙を解き、紙に半分包まれた儘、手袋をしてない左手に乗せる。

レズンにはそれが何で、又、何を意味する代物か検討も付かない。

只、薄っすらと外法と言う言葉だけが脳裏を掠めて、意識の表層に躍り出た。

「骨――」

「勿論、只の骨じゃない。外法の骨だ」

確信していると謂わんばかりだ。

「外法、本当に実在するのですか？」

確かに、この骨が人の小指大程ありながら、一つの間接部位にしか見えないのは、これが人間の骨ではないことを物語ってはいる。只、何処か形状と雰囲気が人間味を帯びていて、巨大化した人間の小指の骨と謂われれば、にべもなく頷いてしまいそうだ。

もっとも、人間が巨大化する筈もないのだが。

だが、一体全体、何処が外法だと言うのだろう。

「いるんだよ。外法は」

畳み掛けるようにランガは言う。

「しかし、それは動物の骨なのでは？」

「そうだなあ、それが自然な反応だなあ。いない方がいいんだ。怨霊魔術師なんてものは。しかしな、これはその証拠なんだよ。いいか、見てろ」

ランガは骨を掴むと、包んでいた紙を取り除き、左手素肌に乗せる。

すると、瞬間にして、骨が軋み、ギギギと金属と硝子が擦れ合うような音を出しながら、爆ぜた。

骨は幾つものパーツに別れ、炸裂をもちに浴びたランガの掌には血が滲んだ。

なんとも不思議な光景だった。

「――爆発ですか？」

「そうだ、これだけではお前には分からないかもしれないが、これには魔術が仕込んである。もっとも、本来の威力はもっと高い筈だ。ある物がこの骨がある場所で何の骨だろうと、拾って見たら、掌で爆ぜた。それを、大聖堂に報告して来たんだよ」

それは拾った人物も驚いたに違いない。本来、正当な魔術体系では、死体には既に魂がない為、魔力を宿らせる事が出来ないと言うのが常識だ。無機物については違う論理体系があり、装置を埋め込む事で有機物とは違った魔法を顕現させる。

「魔術の駆動には、聖刻のような印や、魔法結晶、法具のような固化凝縮魔法液が必要なのではないですか？」

「怨霊魔術師の魔法体系等分らんよ。只、この骨が只崩れた訳ではなく、爆発したのだと言う事は分かるだろう？」

レゾンは無言で頷く。確かに、奇異な魔法だ。

「それでだ、これは恐らく骸骨戦士の残骸と思われる。お前の会ったマールと言う少女は怨霊魔術師で会った可能性が高い」

「そうは見えませんでしたか……」

おかしな少女だったが、怨霊魔術師であるなら、二首大蛇をさつさと片付けてくれた筈だ。なにせ、あの時ピンチだったのは、レゾンだけではなく、マール自身もそうだった筈なのだから。

「自分から怨霊魔術師です、と言うヤツはいまいよ。しかし、この件はお前が目撃者であったから話している。もっとも、実際調査に赴く場合、一人位同行者がいても問題はないがな」

「調査ですか？」

調査とは恐らくマールの調査なのだろう。

しかし、イマイチ、話が性急で読めてこない。それも、峠で落下した時、頭を打って馬鹿になったのだろうか？

「そうだ、完治したら、お前には外法調査の任務が与えられるらしい。私がこの骨の件を教区長に話した所、そう言われた。その聖堂騎士を任務に就かせると。特に急務はあるまい？」

「ありませんが……。実際、帝都に帰還の途中でしたので」

竜口峠を越えたのは今更ながらに失態ではあったが、そのお陰というか、クビにもならず、新しい任務が与えられるようだ。不幸中の幸いと言えるだろう。

「まあ、怨霊魔術師や外法関連以上に重要な任務もそうそうないが

な」

言って、ランガは苦笑する。

「しかし、何故？ 俺なのですか？」

「さっき言ったろう。目撃者だからだ」

「はあ、しかし——」

言い淀む。しかし、ランガが首で先を促すので続けた。

「何故、外法を重要視するのです？ 世間には不明の存在として置きながら」

「それは、事情があるんだろう。大聖堂の。私としては、魔術師として、あのような連中を放っては置けないと言った所だが」

トップのみぞその理由を知ると言う事なのだろう。

恐らく、ランガもその理由の本当の所を知らない。

例えば、魔術医師言うエリート職にあっても知りえない事。それに、ランガは魔術師として意見しているに過ぎない。

そして、レゾンはランガが所属している組織は、自ら、『世界を救済する』と任じ、『救世堂』と名乗る程の組織だ。

救世する為には、敵がいる。仮想敵と言う可能性もあるが——。

なら、世間に公表した方が、実があるような——。

それに、敵なら貴族と言う明確に実態を持つ存在が既にある。

色々と考えて、巡らして、レゾンは答えを出せず、止めた。詮ないと思ったからだ。

考えてもどうしようもない。真実は知らなければ、意味がないし、真実を類推できる証拠も今、自分は持っていない。

只、一つ言える事は、救世堂にとって怨霊魔術師は唾棄すべき相手であり、打倒すべき相手だと言う事だ。

なにせ、骨があったと言う不確かな理由で、その関係者と思しき少女を調査しようと言うのだ。

つまり、怨霊魔術師を倒す事は大聖堂内部で申し上がるにはうつつつけの任務だと言う事。不幸中の幸いどころか、これは僥倖と呼ぶべき事態かもしれないと、レゾンは思った。

さすれば、断る理由など、そもそもない。

何一つありはしない。

「分かりました」

レゾンは答える。そして、苦い顔をしつつ、「俺は未だ動けませんよ」とリフィーにしたように、ホンの少ししか足が動かない事を同じように示して見せた。

ランガは分かっていると首肯し、

「全力は尽くすさ。後は、治療の事は、私らとリフィーくん任せで安静にして置きなさい」

そう言って、ランガは退室した。

退院後、レゾンは教区長の元を訪れるように言い渡された。

――

そして全治した後。

レゾンは一応、回復しているか確認したので、と言う事でシスター・リフィーを伴って、入院していた聖堂病院から馬車で半日掛かる場所にある教区長の聖堂へ赴いた。

待っていましたとばかりに、門番にレゾンは通された。

リフィーは応接間で待つ事になった。

開口一番、教区長は「よくぞ、来た。思いの他、早くて安心した」と言って、レゾンを労った。

教区長の執務室は広く、豪華な机が並び、教区長の座る椅子は一段高くなっており、その前に執務机が鎮座する。

部屋の四隅を聖刻の刻まれた青べールが覆い、厚手の赤いシルクのカーテンが硝子窓を塞いでいる。

加えて、よく見れば、執務机も細かい透かし細工等が施されており、一体、幾らの金でこれだけ揃えたのだろうと思わせる骨董の磁器類や彫像が壁に沿うように配置されている。

大聖堂の下級聖堂騎士ならば、この豪華絢爛さにしり込みしてし

もう筈だが、レゾンは案外と平気な顔で教区長の前に佇んでいる。

そして、侍従に「あれを」と命じる。

命じられた侍従は、暫くして、一振りの刀を持って来た。

反り返った刀身が鞘に納まり、柄の部分に蔦が這ったようなレリーフがある。そして、鐔の部分には断骨と同じく、固化凝縮魔法液と聖刻がある。

何処を如何見ても、法具だった。

更に言えば、その聖刻の輝きから見て、それなりのレベルの物と見る者が見れば分かる一品だ。

「これを渡す。断骨は損傷してしまったのだろう」

正確には紛失が正しいともいえるが、レゾンは黙って聞いた。

言わないでいい事は、言わない。

「これは塩碍えんがいと言う。五級だ」

五級。第七法守には普通ならば、授けられる事のない等級の物。

普通なら、九級か八級、高くても七級だ。

今までの経験や、レゾンの聖堂騎士としての先輩等を見ても第七位にして、五級を受け取った人間の話は聞かない。

この任務の重要性をレゾンは再確認した。

又、難易度も高いのだろう。

この塩碍が保険の意味合いを持っていた。

もっとも、マールが外法であった場合の話で、大聖堂の取り越し苦労の線もまだまだ濃厚だが。

「五級ですか。それは――」

「恐縮するな。堂主さまからきちんと証書も付いている」

そう言って、証書を翳す教区長。

証書にはきちんと堂主の印が入っている。

そして、そもそも、偽造する必要性がこの場合ないのだから、本物である。

つまり、正規のルートで、堂主さまから下賜されたと言う事になる。

「私個人としては第七位の君に五等級を授けていいのか、不安だ。しかし、堂主さまの言葉に逆らうわけにはいかない」

まるで、堂主本人から言われたような言。

事務手続きではなく、実際にこの――五級法具塩碍を渡すよう命じたのだろうか？

「堂主さまが？」

「ああ、そう言う事だ。任務の詳細は省くが、一応、ここいらでは私が一番高位だからな。簡潔だが、概要を説明しておこう」

「はい」

一旦、大きく息を吸い込んでから、教区長は話し始めた。

「君が探すのはその竜口峠で会ったマールと言う少女だ。実はな、暫くして二首大蛇の死体が見つかった。かなり、外法である可能性が上がった。」

だから、これは重要任務だ。それと、君が連れてきたシスターは同行させてもかまわんが、大聖堂内部、及び、外部に、余り他言せんように。

特に、外部の者、民草に言っではいけない。不安を煽るだけだからな。只でさえ、貴族同盟との抗争も佳境だ」

一拍置き、

「現在、マールと言う少女が何処にいるかは分からん、一応、君の証言で、黒ワンピースの十八歳前後の女、髪は銀色、左額に大きな傷と言う事で手配はしているが、なにせ、君が気付かなかったように、髪で傷は隠れるだろうし、服装は着替えてしまえば意味はない。銀髪は珍しいが、そんな女は吐いて捨てる程いる事も又、確かだ。美人と言うのは少ないかもしれんが、美人の尺度も人によるからな。そう言う事で、有益な情報は入っていない。やはり、君自身が見つけてみるかしない訳だ。只、事は慎重にな。外法であると言う確信が出たら、連絡を出せ。」

そうだな……、あのシスターを連絡係にするといい。確か、あのシスターは小竜こりゅうを扱えるそうじゃないか、伝令としてはうってつけだ」

リフィーが小竜を使えると言うのは初耳だ。

確かに、小竜ならば、馬車で半日掛かる道でも一時間で情報を送る事が出来るだろう。

「まあ、一人で挑んでも構わんがな。連絡さえ寄越してくれば」
今までの熱心さが消え、まるで他人事のように最後の投げっぱなしの発言をし、教区長の話は終わった。

レゾンは侍従から塩碁を受け取り、リフィーの待つ応接間に向った。

「ちゃんと、特技があるんだな」

レゾンはリフィーに言った。

「はい。でも、威張れる程ではないので」

謙遜ではなく、本当にそう思っているらしく、全然です！ と手を振りながらリフィーは答える。

「でも、お陰で、一発で見つかったじゃないか」

教区長の聖堂を出てから、とりあえず、当てもないので、二人は小竜を手に入れる所から始めた。リフィーはその手際を見る限り、有能な小竜使いだったが、何故か、個人所有の小竜を持っていなかったのだ。

的確な事を言えば、お金がないし、シスターにとって小竜は不必要だからなのだが。

小竜は本来、帝国中に生息していた。取り立てて、珍しい竜と言う訳ではなかった。

けれども、美味の竜肉と言う事で、一時期乱獲された為に急激に数を減らした。今では絶滅危惧種とまで言われている。

しかし、人に懐き易く、又この性格の所為で乱獲に遭ってしまったとも言える。

そして、何よりも小竜は、空の生き物としては最速に近い飛行速度

を有するので、早馬よりよっぽど役に立ち、急務の際の連絡用として重宝されている。

教区長のお膝元の市で、小竜探しをしてみた所、都合よく、小竜が三匹、市で売られていた。

価格はと言えば、市内の一等地に家が建てられる程の額だったが、今回の任務では大聖堂からそれなりの支援金が出ていた為、難なく購入する事が出来た。

「家建てたかったな」と二人が思ったのは言うまでもない。

購入するや否や、リフィーは手早く、小竜をタイムし、現在地から西と南、北の関所へ向けて小竜を放った。

竜は数時間で情報をかき集め帰還した。

北の関所で手掛かりは見つかった。

教区長の話では手掛かりなしとの事だったが、恐らく、大聖堂筋に頼りすぎていたのだろう。

いくら、現在、帝国内で大聖堂の勢力が強かろうと、天上皇帝を堂主が兼ねていようと、帝国の政治行政基盤の全てを大聖堂が握っている訳ではない。

関所守によれば、確かにエメラルドの目に銀髪の美少女だったと言う話だ。

そして、一番重要な傷も見たと言う。夜間だったのに、何故か、傷が判然と分かった事とそれに言い知れぬ恐怖を抱いた事からよく覚えていたとも。

しかし、ここで一つ問題があった。

竜口峠を抜け、三番分帝と教区長のいるカノザ市を通った先にある北の関所を抜けると、そこにあるのは、現在レゾンとリフィーがいる三番分帝領ではなく、七番分帝領であり、その更に先には天上皇帝直轄領と帝都がある。

七番分帝領は肥沃な平野に位置し、竜口峠のような難所もなく、交通の弁もよい。

普通、竜口峠を抜けた後は、七番分帝領を通りスムーズに帝都へ行

く事が出来る。

又、竜口峠を避けた場合、三番分帝領の北部に行く事が出来ない為、隣の一番分帝領を迂回してから七番分帝領に入らざるを得ない。その為に、日程が延びてしまう。

そして、その問題であるが、北の関所を通ったと言う事は七番分帝領にいるのだろう事は確かだろう、しかし、北の関所の後、道が二手に分かれている。どちらからでも帝都へ行けるが、関所から北西へ行けば、夜明けの市、北東へ行けば城塞都市アラバルに出る。

マールがどちらへ向ったか。

それが分からなかった。

夜明けの市にもアラバルにもその後、小竜を飛ばしたものの有益な情報が得られなかったからだ。

賭けに出るか――。

ヘタに時間を潰すよりは、さっさとどちらかに決めたほうがいい。そして、そもそもの話、もしかすると、どちらにも言っていない。

山越えをした可能性もある。

だが、悩んでもしょうがない――。

そこで、二人はコインの裏表で行き先を決める事にした。

その結果、行き先は夜明けの市に決定した。

――

二人は荷馬車に乗っていた。

それも荷物を積むべき幌の荷台に。

何故かと言えば、小竜を買った所為でしょっぱなから、資金不足になっていた上、チャーターしようとした馬車も多くが、魔物お断りとの事だった。

これからも役立つだろうから、小竜を手放す訳にもいかず、三匹の小竜は鎖も付いていないのに逃げ出す事なく、リフィーの膝の上と両肩に一匹づつ乗っかり、寝こけている。

とても愛嬌のある寝顔を浮かべている。

ついでに、色合いも赤と白のブチ模様、黄色に黒のストライプ、緑と青の斑と実にカラフルだ。一重二十重に服を着込んでいる風にも見えなくもない。

やはり、と言うか、当然、荷馬車故に、人間用の乗り物ではないので、居心地は悪く、又、他に荷物も載っているので自由になるスペースは殊の外狭い。

加えて、偶に荷物が坂道や下り坂でズレ、二人を襲う。

車輪が路傍の石を巻き上げる音と荷台が揺れる振動音を聞きながら、レゾンが口を開く。

「リフィー、こんな事を聞くのもアレだが、まあ、暇潰しだ。何故、大聖堂にいるんだ？」

長い間、パートナーを組む訳ではない。マールが見つからなければ長引くかもしれないが、臨時のタッグである事には代わりがない。そもそも、レゾンは今まで任務に於いて他者と共同戦線を張った経験がなかった。

しかしながら、寝起きを共にし、同じ目的を持っている以上、身の上話とまではいなくても、大体、相手の人となりを掴んでおくべきと思い、質問した。相手の事を知って置いて損はない。

「そうですね。この前は偉そうな事言いましたけど、ようは逃げです」

『逃げ』には何処か強い意志が感じられる。

そう言えば、最初逢った時色々聞いたなとレゾンは思った。

あの時も意思の強そうな喋り方だったが、今も何処か厳格な物言いだ。普段の少し抜けた喋り方と一線を画す。

恐らく、これが彼女が自分の意見を言う時の口ぶりなのだろう。

「逃げ？」

「時代はもう、貴族を必要とはしていない。って事ですかね。時代が人を作ると言います。今、大聖堂の時代なのなら、私はそれにコバンザメみたく引っ付く、それだけです。でも、貴族のして来た過

去の清算って話、嘘じゃないですよ」

コバンザメ、言いえて妙だった。

実際、大聖堂の正義の為と言うよりは、自分の正義の為にこうして聖堂騎士をしている。多くの連中も大概そうだろう。

信仰の為と言う厳格な信徒も多いだろうが、昨今の貴族同盟との闘争を思い返すと、リフィーの言った「時代が人を作る」と言う言葉が現実感を帯びていると感じる。

只、がつつく人間と、コバンザメのような人間とがいる。

時代に分かっていて流されるか、自分が時代を作っていると錯覚しているのか？ そう言う違うだろうか？

自分は？ とレゾンは思う。

コバンザメだろうか、いや寧ろ、ダボハゼだろう。

益があれば、飛び付く。そんな感じだ。

「ああ、俺も似たようなモノさ」

「似たようなモノ？」

興味深そうにレゾンをリフィーは下から、覗き込む。

「親父がトンでもないヤツだったって事」

「えっと、レゾンさま。貴族さんだったのですか？」

驚いたようにリフィーは言った。

あの時、「貴族なら敬語」と言った所為だろう、てっきり、リフィーは平民だと思っていたのだらうな。そう、レゾンは思う。

しかし、リフィーの感覚も正しい。レゾンは正式な貴族ではない。だから、レゾンは通名ではなく、本名で、長真名を持っているわけではない。

「半分正解かなあ。まあ、それでいい思いもしたんだけどな。しつくり来ないと言うか」

「ああ、何となく分かります」

幌の隙間から差し込んでくる昼の日差しが、幌の中の暗がりを照らし、筋を描く。その筋は荷馬車の振動と幌のはためきで自在に形を変える。

そんな筋の万華鏡じみた挙動を見つめながら、何処か遠い目をしつつ、リフィーは同意して、軽く首肯した。

「大聖堂は善、だと思うか？」

「それは難しいですね。聖典は確かに正しい事、一杯書いてありますし、私は好きですけど。その、総体を如何か？ と問われれば、どうなのでしょう？ 人が組織を作る以上、闇は生まれますから」

「よく言うな。シスターの言とは思えん」

やたらと、リアリストなシスター・リフィーに苦笑を漏らすレゾン。

「ええ。その辺り、レゾンさまは分かっていると思いますから。踏み台なのでしょう？」

「――鋭いな」

優れた洞察力だとレゾンは感じた。

ダボハゼよりは踏み台を昇ろうとしている。

いきなり、食って掛かるではなく、慎重に踏み台を積み上げる。

「私も似たようなモノです」

コバンザメも確かに慎重だ。

しかし、自分の過去の行いをいざ振り返ると、本当に慎重だったのか？ とも思える。

結構、行き当たりばったり。

今回の任務も偶々、行き当たりばったりが功を奏しただけでも言える。

それを否定する材料もない。

その点、小竜使いである事を自ら語らなかったり、きちんと持論を持っていたりする部分、リフィーは強かな人物だ。

小竜の技だけではなく、パートナーとしても申し分ない。

そんな気がレゾンを包む。

賢い女を良しとしない男は多いが、これはこれであり。もとい、仕事仲間的には有難いとしか言いようがない。

「似た者同士か」

感慨深く言う。

それに、暫く考える仕草をリフィーはした後、光の筋を指先でなぞりながら、更に持論を展開した。

「貴族社会を潰す巨象の足、それが今の聖堂でしょう。結局、天上皇帝も堂主さまに挿げ代わっただけですから、物の本質は変わってない。とも言えます。」

出来るなら、象使いになってしまいたいですね。この流れを利用して、平和で緩慢な世界を実現出来るなら」

小竜使いが象使いになりたいと言う。

比喩に過ぎないのだが、何処か可笑しく、レゾンは笑いを堪えた。

「緩慢か、きみらしいな。確かにこれはチャンスだからな」

「ええ。どうぞ、のし上がって下さい」

皮肉ではなく、応援するかのよう to 笑む。

「言われるまでもないが、果たしてなせるかな」

「二首大蛇に逢って生き残ったガッツは伊達じゃないのでは？」

「ははは、違うない」

実際は、無謀と勇気を履き違えていた。

と言うか、かっこ付けただけでも取られるような不甲斐ない動機だったのだが。

そんな自省もあって、恥ずかしそうにレゾンは苦笑する。

「レゾンさまは恐らく優しい人です」

リフィーは話の筋を大きくそらしながら、レゾンの瞳の中を覗き込んだ。

何か吸い込まれてしまいそうな魅力でレゾンは感じた。

「恐らくってのが気になるな」

誤魔化すように瑣末な部分に突っ込みをいれる。

「こっちの話です。勝手な解釈ですから。只、世界はもっとレゾンさまのような人で満ちて欲しいですね」

「それは——過大評価だ」

「じゃあ、後の歴史学者にお任せします」

「無名の騎士として終わるだろうさ」

自嘲げに呟く。

「無名のシスターよりはマシですよ」

更に被せるように、リフィーの自嘲が重なった。

七章

七・ラダトとレテユル

「手紙だど？ そんなものの検紙官を通せ、ワシ個人のプライベートな手紙でも、オルディカーンさまからの勅書でもないのだろうか？」

「はい」

レテユルは一応頷く、しかし、どこことなく釈然としない顔をする。それを見、ラダトは畳み掛ける事とする。

「民の嘆願書か？ 捨てろ、それか検紙官に一旦渡せ、ワシは忙しい」

「いえ、しかし——」

未だ納得できないらしい。

「もしかして、あれか？ お前を殴り倒して昏倒させた女から、か？」

「いえ、それは別件ですが——」

言い難そうに言う。情けない話なのでいたし方ないとは言えるが。

「ふん、それにしても情けない。女等に」

「申し訳ありません。ですが、気になりますか？ 聖堂の大壁画

の真下に貼り付けてあって——」

ラダトは慢心に満ちた表情で腕を組みなおし、ぱっさりと切り捨てる。

「ならんな」

「血文字で惨殺予告と書いてあってもですか？」

折角今し方組んだ腕が弾け、驚愕に彩られた、どこか怯えを帯びた声で上体を、机から乗り出し、ラダト。

「今、今、何と言った？」

早口に捲し立てた。

「やはり、そうなのですね、手配外法ナンバー七」

レテュルはニヤリと口の端を曲げた。

「貴様、文書を盗み見たな」

「それについても出過ぎた真似でした」

「だが、ナンバー七は死んだ筈だ。アルコン卿が五年前に仕留めた筈だ、実際、ここ五年やつは姿を見せなかった」

自分を納得させようとしているのがありありと分かる。ラダトの狼狽は隠しようもなく、漏れ出している。

「では、偽称でしょうか？」

「まさか、ワシにそんな脅しの出来るやつはいる筈がない。我が後ろにはオルディカーンさまいるのだ」

「心当たりは？ その、ナンバー七に狙われる」

「――」

「あるのですね……」

「ワシは奴隷商人だったのは知っているな？ その時の仲間をやったのは、ナンバー七だ。オルディカーンさまも商売に関わっていた事があった。一体、どの脱走奴隷かは判らない。が、ワシも狙われておかしくはなかった」

「だから、五年前まで公には仮面を？」

「ああ、こんな特徴的な顔だからな、ラダトと言うのも偽名だ」

「いいのですか、そんな事を」

「お前は信頼している」

「願ってもない言葉です」

慇懃に一礼。

「して、読んでみる」

語尾が震えている。

「本日、午後八時、旧貴族邸宅街中央広場にて待つ。あなたの隣の復讐者――だそうです」

「もしかすると、偽者かもしれんな。ビビリ損だったわ」

安堵に胸を撫で下ろし、ラダトは乗り出していた上半身を下げた。再び、偉そうに腕組みする。

「と言いますと？」

「帝都事件でオルディカーンさまが狙われた時、ヤツは何と書いていたと思う？」

「これとは違うのですか？」

手紙と首っ引きしながら、レテュル。

「何時如何なる場所、如何なる盾、あらゆる策。それを労しても、私は予定時刻にあなたを殺す。暗殺等しない。正面から切り殺す、否、殺し尽す。あなたの骨すら残さない、但し痛みは永遠に地獄でも幸を感じる程に与えてやろう。あなたの隣の復讐者」

あなたの隣の復讐者とはよく言ったもので、何時でもお前を見ていると言う意味を見て取る事が出来る。又、一言一句覚えていて、そのラダトの姿が、少しおかしいとレテュルは思った。変と言う意味ではない。

彼の敬愛するオルディカーンを貶め、驚愕させた物だからこそ、覚えているのだろうが、長年、彼の為に働いて来たとは言え、そのような殊勝な人物とは思えない事を思ったのだ。レテュルは。

「だから、オルディカーンさまは……」

「だが、それは場所をも指定して来た。それでは果たし状だ。もしかすると、ワシのような小物から狙ってくる時点で、ヤツにはもうオルディカーンさまを襲う力はない、とも考え得るな」

仮に本物だとしても、それならば、合点がいく。自分を小物と言うのは卑下には違いないが、一聖堂の司教が大物と言うのはおかしいだろう。

聖堂騎士を招集する権限などないし、動かせるのは手持ちの僧兵数人位だ。市軍は自由に出来るが、ここで市軍をたった一人の人間を倒す為に使ったとあったは、面目丸つぶれだ。

「只、殺すだけではないのでしょうか？」

「復讐者の頭なんぞ知らぬ。しかし、ヤツは偏狭なプライドで闇討ちを拒否している。こっちとしてはいい事だろう」

過去、ナンバー七が果たし状じみた惨殺予告をしてきた例はない。

オルディカーンも人間だ、誘い出して殺す事など幾らでも策謀を巡らせば出来る筈、それをしない理由は例え理解出来ない代物でも、ナンバー七がそういう人物である事だけは過去の資料からして確かなのだから。

「確かに。それで如何なさいます？」

「出向く」

強い声で宣言した。

「それでは僧兵長を呼びましょう」

「待て。火造^{ひづくり}も持って来い」

火造、歴代夜明けの市市聖堂司教に堂主より下賜される事になっている法具。位は三級。強力な法具だ、火を操る力を持ち、火竜を顕現させる。もっとも、夜明けの市初代司教はラダトであり、ラダトの私物のような物と考えてもいい。

「誰が使うのですか？ あれはラダトさましか、契を結んで――」

「ワシ自ら出向く、そう言っているのだよ。ワシを脅かして楽しもうとした偽者なら、四肢断絶の後丸焼き、ホンモノであっても、こんなセコい状態のヤツに負ける気はせん。火造があれば十分だろう。アルコン卿も騎士時代は三級法具印槌でヤツを五年にも亘る潜伏に追い込んだのだ。火造は三級とは言え、破壊力言えば一級。ホンモノなら追い返した後、増援に――、そうだな、オルディカーンさまに応援要請をしておけ。それで、賊の方はどうだ？」

「あ――。失念しておりました。しかし、逃げた奴隷は大方回収しました」

賊が逃がした奴隷達は余りに頭が悪かった。さっさと市外に出ればいいものを何時までもうろついているからこんな簡単に捕まる。

全く持って愚民だ。ラダトの叙任以来の右腕であるレテュルは市民の愚鈍振りを身にしみて知っている。

「手が早いな、やはり、お前は優秀だ」

他意なく手放して褒める、ラダト。レテュルの手腕はやや自分の利益に奔る面があるとは言え、市聖堂副支配としては、申し分ない

のだ。

「が、賊よりもガキだ、女のカキ、十歳ちょっと位の、見つかったか」

「いいえ。条件に合う女のカキは、二名いましたが未だ――」

自分を取り逃がした事は言わない。言っても、利にならない。

「うむう。応援要請はして置くに越した事はないな、そのガキの一方が問題だからな。ナンバー七の数倍」

「何者です？」

自分を取り逃がしたガキの片一方に一体、何があるのか？ レテユルは興味から訊く。

「南の大貴族の娘、これで十分だろう？ 一杯食わせると、オルディカーンさまの命だったのだが、しかし、その理由ならオルディカーンさまも援軍を送らない筈はないな。余裕ではないか。ビビる必要もなかったわ」

不幸中の幸いか、はてさて、不利が利に転じたからか、ラダトは哄笑する。その野卑な声は司教執政室中に響いた。

八章

八・夜明けの市でのこと

「二人とも、捕まらないでくださいね」

そう言いマールはクラヤとイダサをホテルに残して去った。

彼女が何をしにいくのか、クラヤとイダサは手紙の内容から知っていた。

けれども、追わなかった。

相手はラダト。

クラヤとイダサを売ろうとした卑劣漢。

そして、マールなら勝てるだろう。

そう、クラヤもイダサも思ったからだ。

そして、戻って来てくれるのだろうとも思った。

何となく、それが当然な気がしたのだ。

夜の街の明かりを消しさる程の火の渦を見るまでは。

流石にあの炎の渦中にいるのなら、ヤバイと感じた。

けれども、それは二重の誤算であった。

――

そして、話は少し巻き戻る。

レゾンとリフィーが夜明けの市についたのは、丁度マールが食堂にラダトの似顔絵を出したのと同じ頃だった。

二週間近くになる差が、徒歩と荷馬車で埋まる筈はなかった。

つまり、マールはこの二週間、只夜明けの市へ向っていた訳ではないのだ。

しかし、そんな事とは露知らず、夜明けの市を訪れた二人は余りの活気に舌を巻いた。

そして、噂には聞いていたが、市聖堂のまん前にある奴隷市場には流石に気が滅入った。

多少箍^{たが}の外れた正義感を持つ人間なら、暴れているに違いない。そう言い合った。

先ず始めに、市聖堂は後回しにして、市内を一通り廻る事にした。教区長の手掛かりなしが当てにならなかったように、この市聖堂も先んじて小竜で情報を調べようとした所、何もないとの回答を得ていたからだ。

挨拶するにしても、日暮れ頃でも構わないだろう。

そう、意見の一致を見ていた。

しかし、これも誤算であった。

夜明けの市は広く、住民からの情報は芳しくなかった。

精神障害者と思しいと言う重要な情報も余り有益ではなかった。

奴隷を目にし、目の色を変えている人々の方が、よっぽど精神を病んでいるとしか思えない所為もあるが、往々にして市民そのものの感覚もおかしく、酷い者になると、精神障害者は食べると薬になるだとか、火に投げ込んで遊ぶものだとか、肉壺だとかどうしようもない事をのたまった。

だとすれば、マールは既に手に落ちている可能性もあったが、それならばと奴隷市場を見に行った。

――
昼過ぎ。

奴隷市場は何故か混乱の只中にあった。

『賊が出た』と人々は口々に言っていた。

「賊とは何だ？」と問質すと、

「目玉商品さ」と返された。

話を要約すると、以下のようなになる。

クラヤシャン・イ・クアンスケルプトラ・イム・ハシュバイク
ニトーマと言う貴族令嬢が来週、市に出るらしい。

そして、名前から分かるようにハシュバイクニトーマ伯の娘だ。

ハシュバイクニトーマ伯は貴族のクラスで一番上に当たる大面卿おおもてのきやうの爵位を有し、現在に於いては、最も力を持った貴族の残党とも言え、又、貴族同盟の盟主である。

貴族同盟は救世堂への反抗組織の一つだ。

その盟主の娘を奴隷として売る。

それが目玉商品。

「実に素晴らしいだろう」

答えた男はそう答え、余りにも表情が（心を持った）人間とは思えなかったので、レゾンは取り合えず、殴って昏倒させた。

その為、又、別の市民に話を聞かねばならなくなった。

「スパイだよ。娘を取り戻す為の」

二人目はそう答えた。

しかも、賊は市聖堂の地下に出たと言う。

ラダト司教が奴隷市を大々的に展開しているのは知っていたレゾンだったが、大聖堂施設の地下室をその為に牢獄にしているとは、やや、斜め上を行く回答だったと言えよう。

「ああ、犯したかったぜ」

二人目もそんな事を言うので、やはり、レゾンは殴って置いた。

そうこうするうちに、夜が近づき、西の空は朱あけに染まっていた。

「そろそろ、挨拶にでも行くか」

気は進まなかったが、マールが捕まっている可能性もあり、出向く事にする。

結局、殴り飛ばした人数は二桁になっていた。

憲兵に通報されそうになった時もあったが、聖刻と塩碁を見せれば、市民は黙った。

内心、レゾンは「これは使える」と思った。

レゾンとリフィーの二人は一旦宿に戻らず、市聖堂へ向った。

「エルムが寂しがります」

とリフィーは言ったが、そんなに時間の掛かる事でもないのと説得した。

因みに、エルムは虎模様の小竜の名前である。

市聖堂は昼程慌ててはいなかったが、明らかに奴隷と思しき人間が僧兵にしょっ引かれ、奥の間へ消えて行った。

レゾンは取りあえずそれらを見ない事にする。

今やるべきは奴隷解放ではない。

そして、ラダト司教への取次ぎを市聖堂のシスターに頼んだ所、

不在だと言う。

「不在？」

「はい、急な用事とやらで」

申し訳なさそうにシスターは軽く頭を下げる。

「――急な用事」

それでレゾンが帰る気配がなく、又相手が聖堂騎士である所為か、シスターは続ける。

「もしかすると、賊絡みかもしれません」

「賊？」

「昼、聖堂が賊に襲われたとかで、僧兵さんが何人か殉死されて」

「ああ」

昼過ぎに騒ぎになっていたアレか？

しかし、妙だ。

賊の討伐に司教自ら赴くだろうか？

判然としない。

何か、もわもわした蟠^{わだかま}りが頭に纏わり付く。

「それで、そのだ。僧兵の遺体は今何処に？」

マールが賊である可能性もあるのではないか？

そう、レゾンは考えた。

二首大蛇を倒したのがマールならば、どうして最初から力を使わなかったのか？

何かしらの制約の存在を示唆する。

そもそも、魔法に詳しくはない。

怨霊魔術師の魔法体系など知りようがない。

しかし、仮に窮地にならなくては、力が使えない可能性がある。

だとすれば、あの人間のクズとか思えない市民たちに売り飛ばされる為に地下室に閉じ込められたとも考えられる。

その時、竜口峠で逢った時のように、無防備状態だったら？

そして、自分が気絶した後、二首大蛇を倒した時のように、力を使い、脱出した。

仮定でしかないが、死体を見れば分かるかもしれない。

死体にあの骨があれば黒。

分からなかったり、なかった時は地下室も調べればいいだけの話だ。

地下室にあの骨があった場合は限りなく黒。

「奥に未だあると思いますか」

「奥とは？」

「清めの間です」

『清めの間』サナタラムとは葬儀を行う前に死体を安置しておく場所だ。

「見せてくれないか？」

「はい、聖堂騎士さんなら構いませんが、そちらのシスターはちょっと」

レゾンの隣に佇むリフィーを見ながら、言い難そうにシスターは言った。

「いいですよ、レゾンさん。行って来て下さい」

「すまん」

手でも謝罪を示してから、レゾンは『清めの間』へ向った。
『清めの間』は、中央に位置するアイコンより左手の扉を開けた場所。

――
清めの間は、静謐と形容し得るに相応しい場所だった。

真っ白のシルクが死体を包み込み、一つ一つの死体は大理石の台に乗せられている。

死者たちの、白く青々した隈と妙にマッチする。

死者の為の部屋、その目的の為だけに造られただけの事はあった。
この雰囲気自体は悪くない。

神聖なものだ。

しかし、この市聖堂が行っている事は果たして神聖だろうか？
リフィーと逢ってから、どうもこう言った事を悩んでしまう。

レゾンは頭を抱えた。

清めの間を足元から奥まで見やる。

床にも死体がある。

最初、入った時、気付かなかったのは顔まで隠すようにシルクが掛かっていた所為だ。

死体はざっと見積もって二十はあった。

その全てが僧兵かは分からない。

だから、一つずつ調べるしかなかった。

そして、見つけた。

――異様な死体――。

胸の肉がごっそり何かで持っていかれている。

もし、胸に爆薬を仕込まれて、そこで着火されたら、こんな感じに仕上がるのではないか？

もしくは、大口径の魔導器マフアダラで打ち抜くとか。

少なくとも魔法銃の威力ではない。

火薬銃なら何か臭う筈だ。

そして、魔導器の可能性もゼロだ。

何故なら、僧兵達は地下室で戦った筈だからだ。

どうやら、鍵は地下室にある。

しかし、先程のシスターは副支配も留守だからと、地下室への入室を断った。地下室は副支配の管轄であるらしい。

そこで、レゾンは潜入する事にした。

潜入とは言っても、僧兵達はラダトと出掛けているらしく、又、僧兵長も一緒らしい。その為、残っている僧兵達にやる気はなく、容易に地下室へ行く事が出来た。

そして、見つけた。

恐らく、あの死体が製造された場所。

夥しい血液が黒々と文様を描き出している先の壁。

白い破片。

確かに骨。

しかし、手にしてみても爆ぜる気配はない。

一度、爆ぜているからだろうか。

つまり、ランガの持っていたものは不発弾と言う事になる。

他を捜すも骨はない。

結局、黒か如何か分からない。散々な結果だ。

が、とレゾンは思う。

賊イコール、マールならば、そのマールを追ったラダトは何か知っているのでは？

未だ、マールが怨霊魔術師である事に半信半疑のレゾンだが、取り敢えずは、仮定で話を進めるのを優先。

今度は、ラダトの執務室へ入る。

そこで、又しても異様な物。

血文字で書かれている手紙。

中身に目を通す。

賊とは関係がない。それだけは分かった。

ラダトと何か確執のある相手が出した手紙だ。
けれども、何処かレズンは釈然としない。

この手紙がキーになる気がした。

如何して？　と言われれば、「カンだ」としか答えようのない物
だった。

「あ、レズンさま。遅かったですね」

待ち草臥れたとばかりに欠伸あくびをしながら、

「ああ、すまん。所で小竜で伝令を頼みたい」

「何か分かったんですか？」

「強いて言うなら、白に近い黒か」

「良く分からない色ですね」

「俺も良くは分からない。一応、教区長に報せてくれ。後はこの
分帝は……」

思い出そうとするレズンに、

「オルディカーンさまですね」

「報せて置いてくれ。堂主さまが知っているのだ、聖堂騎士レズン
の外法の件で通じるだろう」

「それで、何を伝えます？」

「援軍要請かな。どの道間に合わんだろうが――」

「そんな、急ぎなんですか？」

「ああ、でもやるに越した事はない。頼んだ」

「分かりました」

言って、リフィーは宿へ向った。

小竜を伝令に出す為に。

「さて、旧貴族邸宅街か――」

旧貴族邸宅街の入り口を囲うように、監視の僧兵が配置されていた。

「やはり、只事じゃないな……」

何人か、何をしにこんな場所に——ゴーストタウンに來たのか、何人かの市民が僧兵達に追いつ返されている。

何か上手い言訳を思い付けば通してくれないかともレゾンは考えたが、無理そうだった。

銃声がした。

魔法銃のものだ。

レゾンは飛び出す。

何処まで行っても、行き当たりばったりは直りそうにない。

監視の僧兵を塩碇の鞘で打って昏倒させて、旧貴族邸宅街を進む。人の声がする。

何かやり取りをしている。

……。

見えた。

一人と三人が向き合っている。否、四人。

一人、松明を持っている。

そして——。

あれは——。

一瞬、飛び出そうかと思ひ、踏み留まる。

取り敢えず、一部始終、觀察だ。監視だ。

耳を^{そばだ}敬て、家の陰に慎重に身を隠す。

過去の任務で隠密任務をこなした事もある。

僧兵達にバレる筈はない。もう一人は分からない。——本物なら、バレるかもしれない。既にバレていないとも言えない。

そして、レゾンは息を潜めた。

九章

九・月の晩、果し合い

杖の形状の火造をつくラダトとレテイユ、僧兵長に魔法^{まほう}火矢^{びや}を携えた僧兵が五人、加えて、松明^{たいまつ}持ちの道化。

一行は時間よりずっと早く指定の場所に来ていた。

指定の場所は、町外れの住宅街。今は廃屋が並ぶ。

嘗て、中流貴族の邸宅が軒を連ねていた。

今も家々はその時と変わらず建っているが、主はおらず、又、市民の打ち壊しで無残な姿を晒す家も少なくはない。

待ち伏せの危険もあった。しかし、復讐者の意味不明なプライドに掛けてみた。商売はギャンブルみたいなもの、ラダトは常々そう思っている。だから、これは、彼のポリシーにも合致していた。

それに、相手もハナからこちらが律儀に時間通りに来るとは思っていない。

「何処にいる？ お前は闇討ちを嫌いなのだろうか？ 早く正面にでろ」

大声で到着を告げ、ラダトは僧兵に目配せする。僧兵達は魔法火矢を構えた。望み通りのアホならば、正面に来るに――影が見えた。すかさず、号令が飛ぶ。

「撃て！」

ガシュ！ ガシュ！

魔法粉^{まどうこな}が爆発する銃撃音が連続。影に吸い込まれるように発射された鉛玉はしかと着弾した、しかし、魔力によって押し出された鉛玉は一つとしてその影にロクな傷をつけなかった。

「相も変わらないクソですね、ヘミル」

影は右手を翳しながら言う。正確には右手ではない、右手から伸びる骨の手だ。禍々しい骨の手、巨人の物のように大きく、純白。

一つの指に恐ろしい数の間接があり、百足むかでのように、わなわなと蠢く。全ての弾丸はこの指に挟み取られ、封殺されていた。

そして、肘からも一本、突き出た骨。

ラダトは畏怖した。しかし、気取られぬように、命ずる。

「撃て！」

号令——被さるように五つの妙な音、——発射音がない。

ラダトは周りに視線を巡らす。筒持僧兵つつもちは悉く地に伏している。

道化が隣で松明を持ちながら怯えている。

どういう事だ？ 何をされた？ 魔法の発動も、感じなかった。

敵は武器も持っているようには見えない。あるのは、巨人の骸骨から持って来たような大きな手だけだ。

仕込みか——

「何を——」

影の骨の指がやや短くなっている。飛ばしたのだ。間接を外して、指骨を。巨大で長大な上に異常な間接数がある骨の手はまだまだ残弾数を優に五十は残す。

「本物か？ 意外としよばいな」

「そうでしょうか？」

半分ラダトは強がっていた。が、敵は噂程ではなかった。家一位軽く吹き飛ばせるモノだと思っていたからだ。だから、ラダトの心内の残り半分は本当の強気だ。

勝てる。——ナンバー七《骨出女》ほねだしおんなは帝都事件の犯人にして、手配外法でも格付けが高い。倒せば、中央へ招かれるかもしれない。

欲が沸々とラダトの全身に——

「ラダト司教」

骨の攻撃を避けたのか、僧兵長が指示を仰ぐ。が、ラダトは僧兵長にではなく——

「縛れ！」

きいいいん。

耳を劈つんざくノイズ。

レテユルが十字の鎖付ペンダントを翳しながら不敵に笑う。

影の体全体が水銀中毒のように震えて、時間が止まった物体の如く停止。

「姿を長く見せたのが運の尽きだなあ？」

「でかした。レテユル」

「ラダトさまが勇氣ある行動をしたからですよ」

レテユルは静止し微動だにしない、否、出来ないシャシマールに近寄る。

「残念だったね、ナンバー七。あの時はよくも殴ってくれたね？ お前があの子と同一人物でよかったよ。って事は賊もお前だね」

「――」

レテユルの法具縛身によって、硬直し、眉ひとつすら自由に出来ない女を見て、嗜虐心も露にレテユルは言う。

「ふ、縛身に魂を空間に固着されたら、例え、どんな達人でも動けない。ああ、口だけ許可しよう」

レテユルは十字を微かに燻された煙みたく左右に揺らす。

再度、耳を劈く音。但し、音は小さい。

「これでいい、さあ、ラダトさまじつくりと。話が終わったら先ずボコボコにさせてください」

「ああ」

「へミル。いいご身分になったのですね？」

憎き相手の筈だが、慇懃な態度を崩さない。慇懃無礼のような皮肉も籠っていない。

だが、それが却って余りに冷静に見え、因縁を持つ者達の背筋を寒くする。

「ふん、お前こそ堕ちたものだな？ マニユーリンカフカの娘？ 名はシャシマールだったかね？」

十年前、没落した貴族の娘。

自分が未だへミルと名乗っていた時、この娘の売買に関わった。解せた。納得がいった。

この娘の復讐の相手、今までナンバー七が狙った相手――、全てあの時の関係者。

ラダトは得心が言ったとばかりに、大きく息を吐く。

それから、ずいと腕を突き出し、シャシマールの顎を掴み、親指と掌で頤を包み、親指の爪を立てる。

薄っすら、血が出た。

一方、シャシマールも睨み返すように見上げる。

「落としたのはどちらさまでしたかね？ それにしても、余裕綽々ですね？」

「ふん、お前がナンバー七と言う証明があつた紙だけじゃ薄いからなあ。先ず、召し物から剥いでやろう、次は皮。そして、髪、最後に眼球。その後は火葬にしてやる」

ラダトが下卑た笑いを――

ザリユ！

気味の悪い音が耳に届く。

「ぎええ」

僧兵長の断末魔。

「何だ？」

「仲間か！」

周囲にぐるりと視線を這わせ、敵影を捉えられず、レテユルは問う。

「さあ？ 私は知りませんね」

蔑みたつぷりに、シャシマールは鼻を鳴らす。

「アマあ」

レテユルは僧兵長の介抱もせず――顔の上部を吹き飛ばされ即死に違いないのだが――シャシマールに接近し、鳩尾を全力で殴ろうと振りかぶり。つい、力み過ぎ軌道がそれる。

拳は腹部を打つ。

手を通じ、筋肉を殆ど感じない。しかし、臓物の感触だけがして、フォアグラを握り潰そうとしたような変な感覚がレテユルを襲う。

食肉、皮を剥され足で吊られ、連なるサンドバッグに見える――
そう、肉屋に下がった肉塊、あれを叩いた気分にも似る。

類似しているようで、何か違う――そもそも、感触が違う――、
変な妙な心持。

「まあ、待て」

ラダトは次を構えるレテユルの肩を叩き、

「僧兵等、如何にでもなる」

そして、シャシマールの方に正面顔を向け、

「褒めてやろう、僧兵衆がこんなに瞬殺されるとは思わなかったよ」

「しかし、仲間が――」

言い^{よど}澱み、

「こいつが手の内にあるんだ。首謀者が死ねば報酬も出ない。仲間
とやらも早々下手もせんさ。それにだ、よく見ろ」

ラダトは僧兵長と直線状に並ぶ、家の塀を指す。

僧兵長の血と共に何か白い物が――。

骨だ。

指骨。

何故かはつきり判る。暗がり故に白きが映える。

「骨？」

「そうだ、こいつがやったんだ。仲間はいない」

「ですが、縛身の効果は――」

一瞬にして、シャシマールの顔に悪鬼を思わせる面が貼り付く。

そして、ザリユ。プチュ！

「そんな――」

レテユルの背中から骨が生える。

シャシマールの骨の人差し指がレテユルの心臓の辺りを貫いてい
る。そのせいか、血がびゅうびゅうと噴水のように飛び出す。

「そんな、馬鹿な――」

「いい事を教えてあげます。私の魂は複数なんですよ」

ニヤニヤしながら、シャシマールは手を横に振る。

腕ごとレテュルは横に流れ、遠心力で吹き飛び、住宅の壁に当たり、グチャと汚い音を立てた。そして、もう一回、地べたに落ちてミチっとやはり汚らしい音を出す。

「ヘミル。やっとなあなたの番です。楽しかったですか？」

ラダトは腰を引きながら、退^さがる。

未だ未だだ。火造がある。焦りつつも、ラダトは手にした杖に力みながら魔力を送り始める。例え、相手が外法でも、世渡りにはもつともっと人格的に外法な者達がウヨウヨしている。

そんな連中と商売し、この地位を得たのだ。

そう簡単にはやらん。腰砕けにもならん。

だが、今は――

時間を稼がなくては。

ラダトは動作がバレぬように慎重に、慎重に、火造に魔力を送り続ける。

眉間を流れる汗と、夜気に冷える背中がイヤに鋭敏に感覚神経を打つ。

「私は今、とても楽しい。あなたが殺せる。そう思うと興奮しますよ？」

綺麗な顔を恐怖の権化に変えながら、ラダトにじりじり寄る。とは言っても、表情は何も知らない人物が見れば僅かに笑みを湛えているようにしか見えないだろう。これは、見る者によって、恐れを与える類の物。

シャシマールの右足が前へ、ラダトの左足は後ろへ。

退がるラダト、近^{せま}るシャシマール。ぎこちないステップを踏み合っているように。

「記念すべき六人目、六なんて数字、全然記念じゃないですね？ 記念はオルディカーンにする予定ですよ？」

早く、早く。額を更に止め処ない脂汗を濡らしながら、杖――火造に魔力を送る。

チャージはまだか。

道化を見る。怯えて、地に顔を埋めた儘だ。松明も持った儘だ。

「今は如何してしているんですか？ 奴隷商カファレム一家の^{だいで}大丁稚^{つち}さん」

「望む、人間がいるんだ」

答えた方が時間を稼げそうだったので、ラダトは答える。なんとか、声を絞って。

「誰です？」

「救世堂だよ」

「身内商売なら、奴隷市はしないでしょ？」

「――う。民も望んでいる」

「一丸となって？ もう、十年ですね」

「――」

「儲かるんでしょうね？ 私も商人の子に生まれたかったですね」

「それはそれで苦勞するぞ、堂主さまが天上皇帝になる以前の時代はな」

「分かりますよ？ 凄く、分かります。ですけど、あなた達のそ

れは結局、相手が貴族、理由なんて、それだけだったのでしょ？」

「何が悪い」

悪^{ふう}びる風もない。

「奴隷商人らしいですね。人を商品として見るとそうなりますか」

来た。身体を巡る電撃のような感触。魔力のチャージ完了の合図

！ ラダトの顔が華やぐ。

それを見たシャシマールは訝^{いぶか}しみ……。

ゴウウウ！

突如の熱風。

「ひあ」

シャシマールを炎が包む。ラダトは逃げるように走り、距離を取った。

炎の竜巻から転げ出たシャシマールは服に引火している。

それを叩く。熱で殺すつもりだった所為か、簡単に火は消えてし

まった。

「火造。扱えたのですか？」

「当たり前だ。バカめ。火造に気付かないとは」

「そんな魔力があるとは、思えなかったので放置したのですけどね？
それに、バカはあなたですよ？」

「何だと？」

注意を逸らさせ、ラダトは第二波を撃つ。

道化の持つ松明から伸びた火の筋が一旦空へ上り、直下してシャシマールを狙う。

第三波、四、五。

周りの建物に火が付く。

屋根は火の筋で碎かれ、瓦が舞う。

「ひははああ、バカが、死ね！」

ラダトは杖を振る。

火は、今度は竜を模した姿となって、シャシマールを襲う。
口を開けて飲み込もうとし、避けられ、上下の火で作られた顎が空を切り、噛みあう。

竜を尖兵に、ラダトは飽く事なく、火の筋も打ち上げ続ける。

竜の線の攻撃、筋の点の攻撃。

二重攻撃。

シャシマールも負けじと骨の指を打つ。

が、ラダトを庇護する火の壁が現出し、防がれる。

辺りは何時の間にか、昼のように明るく、いや、昼以上に熱く、眩しい。

家々からあがる火の手が黒い煙を生む。視界が悪くなっていく。

「く」

シャシマールの表情が苦悶に染まる。

接近出来ない。

理由は、ランドマインのように敷設された火のトラップが火の筋が着弾した辺りには埋められているからだ。これも火造の能力の一

つ近づくだけで、その上を通らなくても火は爆発し、火球でもって対象を焼く。

事前に火造の能力を知っていて助かったと言えた。

知らない者なら、わざと火の筋の砲火に隙を作られ、そこに飛び込み、実はその場所は、前に筋が着弾した場所で、焼き殺される。と言う事になる筈だ。

実際、ラダトはわざとらしく前進出来るルートを造っている。

「くそ、何故来ない」

ラダトはラダトでイライラしていた。トラップ、火の筋ホイホイに敵が掛からないからだ。

攻めあぐねるシャシマール。もう、先程から骨を撃っていない。射程からそれてしまった。それに、この視界では上手くエイミング出来ないだろう。

しかし、ラダトの猛攻は続く。

恐らく、闇雲に撃っている。当たるとは思えない位置への着弾が増えている。

が、火の竜は的確にシャシマールを狙う。

自律制御のなのだろう。

「厄介ですね」

火の竜を倒す事は不可能だ。直接にはだが。

火の竜は火を魔力で成形して自律でターゲットイングさせているに過ぎない、何処かに魂がある訳でもない。殺せない、だから、倒せない。

消すには、術者を仕留めるか、杖ごと破壊するか、術者が魔力欠乏になるか、火元を消すか、の四択。

一は距離が開き過ぎ、二も同じく――。

四も同じ。

なら、三しか残らない。

言ってしまうえば、ラダトがそう魔力の潤沢な人物とは思えない。やはり、三を選ぶべきだろう。

一番、無難——その言葉が似合う戦術。

しかし、それはシャシマールにとって敗北を意味する。敵の尽きに乗じるなぞ——。

それでは、意味がない——。

「ふう」

シャシマールは肩を落とし、嘆息し、回避行動を止める。

「未だ恢復かいふくしていないんですよ？」

独り言。

そして、走り始める。

火の粉を振り払い、火の地雷に骨を撃ち込み爆発させる。

走りながら、撃ち続ける。闇、加えて、焰、その中で黒の衣装に禍々しい骨の巨大な手。煉獄をひた駆ける死神。

残弾数がどんどん減っていく。なるだけ、消耗は控えるべきだったが、仕方ない。

最初の戦闘ポイントが目に入る。

シャシマールの眼球に狂ったように杖を振るラダト。

火の地雷の連続爆発に、勝利でも噛締めていたのか、ラダトの目が恐怖に見開かれ、僅かに視線から畏怖に埋もれた畏敬が覗く。

パン。

一気に四指から骨のブロックが放たれ、火の壁も出せぬうちに、ラダトの僧衣を貫き、力の儘にラダトを後方へ引き摺り、廃屋と化した家の壁にその体を縫い付ける。

拍子に杖が手から落ちる。

カン。

僧衣を破き逃げようと画策するラダトを尻目に、シャシマールは杖を握り、一言。

「鎮火——」

さっきまでの業火が嘘のように一瞬にして消え去る。

シャシマールは満足げに頷く。そして、ラダトを向き、ザリユ！

今度は四肢で縫い付け直す。

二の腕と両腿に骨を穿たれ、ラダトはサルのように鳴く。

「ひい」

「じゃあ、楽しい事始めましょう。まずは包丁探さないといけませんね」

歌うように、シシヤマールは言った。

十章

十・ガイ者の事

目の前で行われているのは何だ？ 悪い冗談か？

人間が裁かれている——いや、捌さばかれている。

捌きが裁き。

捌かれている人物は最初、「助けて」と許しを請い、ハラミが取り出された所で声を出せなくなり、今し方、取り出されたハラミがこんがりといい匂い——。

げえ……。

嘔吐した。

この光景そのものは、市街の肉屋のしている事と何も変わらない。生きているものを切り刻むから残酷か？ 違う。踊り食いと言う高級料理もある。

じゃあ、何故、何故、こうも嫌悪感、違う。圧倒的不快感が沸き立つ？

解体されているのが人間だからか？

だから、こんなにも残酷だと思ってしまうのか？

肉屋が音を聞き付け、レゾンの方へ視線を投げる。

目が合った。

「……あんた何者だ！」

レゾンは糾弾する。口腔が酸っぱい。舌がピリピリする。

「お久しぶり、レゾンさん。見てたんですか？ 襲えばよかったのに」

自嘲するように肉屋は笑う。

とてもとてつもなく嬉しそうだ。

レゾンと再会してではない。

この狂った行いに嬉々としている、臨んでいるのだ。

「その口調？ あれは演技だったのか？」

余りにも違う。

肉屋は竜口峠で同道した少女の姿形すがたかたちをしている。一部を除いてだが――。

「いいえ、あれも私、これも私」

肉屋は、今度はホルモン串の製造に入った。汚物の臭いが炭の香かおりに混ざった。

肉――は未だ生きているようで、僅かに喉仏のどぼとけが上下する。

「止めろ！」

「どの道、後少しの命ですよ？」

肉屋は肉に焼いた自分の肉を食わせた。

噛む力のない――歯が一本も見えない――肉の両顎を無理やり手で強引に上下させ、強引に飲み込ませる。

肉は吐き出す余力など残っている筈もなく――。

「あらら、窒息ですか？」

肉屋は剥き出しの心臓を掴む。

直接式人工呼吸――。

吐き気がぶり返す。肉の心臓から鮮血が噴出す。

切り付けるか？ レゾンの良心が盛んに、「キレ」と叫ぶ。五月ガ蠅ナる。

が、目の前の惨状に足が地に縫い留められ、微々も動けず……。

「死にましたか？」

「おい、生きてます？」とワザとらしく肉の耳――恐らく耳だった場所、削がれて跡がない――に囁く。しかし、肉は死んでいた。当たり前だ。こんな事すれば、死ぬ。

「さて、汚い物は焼いてあげましょう。世間にとって目の毒ですからね」

肉屋は今度、魔術師になる。

法具を手に「消炭けしずみに」と囁く。

一瞬にして肉は燃え上がる。

が、そう早く炭に変わる筈はない。

肉はメラメラ燃え続ける。

そして、今度、肉屋は杖状の法具の聖刻を手から生えた骨で打ち碎いた。

まずい、目を覆うねば。

瞼を貫通する程の光だ。目は伏せなければならない。怯えを押さえ、下を向く。尚且つ、腕で目を覆う。

光が消えるまでレゾンは伏せ続けた。殺されるかもしれないが、肉屋は襲ってはこなかった。

「消えましたよ？」

目を開ける。

光源は一つだけになっていた。燃えている人肉だけ。

「何故、こんな事をする！」

「私だから、ですよ」

平然と肉屋は言った。

レゾンには信じられなかった。

目の前の肉屋は、竜口峠で出会ったマールと言う少女に違いないのだ。

外法かもしれないではなく、外法で正しかったのか。

しかし、余りに口調が違う。否、きちんと喋れている。

が、それ以上に目を引く外見の変化。

右腕の肘辺りから手首を通り、甲の辺りまでにかけて生えている骨。

六本の骨。一本は肘から直接に突き出、背中の方へ伸び、他の五本は前方へ伸び、恰も手のように見える。肘の骨には間接がなく、残りの五本には幾つか節がある。それが、余計手に見える。

「二重人格か？」

「ちよっと違います。私は只の精神障害者じゃありませんので」
只の精神障害者ではない——外法——？

「やはり——」

レゾンの言葉を遮り、嬉々とした様子でマールは語る。

「二重人格と言うのは一個の魂が分裂する事です。私の中には複数の魂が入っています」

「そんな事、器が耐えられる筈がない」

一つの脳に一つの魂。二重人格と言う例外はあるが、それは元々一個の魂だ。

わざわざ、分裂を否定するのだ。元からか——そんな筈はない……。

外法によって、後から入れられたのだ。

「だから、脳幹は焼ききれてしまいましたよ。死者の魂の所為でね、でも感謝しているんです。これは私に神が与えた復讐の力、そう思うんです」

「死者、やはり、あんたは外法だったのか」
確信。

「いいえ、それ少し違います。私はどちらかと言うと犠牲者、もとい、不幸な事故ですが、この傷——」

額の左側の傷。

あの時、異様な憧憬と畏怖に苛まれた不思議な傷。

暗がりで映える、不可思議な傷。

銀髪の方がずっと映える筈なのに、今日は満月。だから、尚更そうなる筈なのに、穴に落ちた時と同じく、傷跡は赤黒い表情で、レゾンの網膜に自己を語らんと謂わんばかりに迫る。言い知れぬプレッシャー。

「傷——」

キンスマスドロク

「ここから、人骨王に使われた魂が入った、私の左脳は彼らに食われてしまいました。そして、お分かりですね？ 今、私は人骨王の魂で動いているのですよ」

「あんたは人骨王なのか」

人骨王。怨霊魔術師、最高の骸骨戦士。

一体が成人男性十人力と言われるその当の骸骨戦士、百人力と言

ドロカ

われる悪魔の尖兵。

数十人の、場合によって数万人の人間の魂と、骨格から構成される。

骨も全てを使用出来る訳ではない。

一人の死者から使える骨は一つだけ。

だから、膨大な死者を使わねばならない。

しかも、重要な制約がある。

完成の二週間前までに死んだ人間でなくてはならない。

加えて、術者が殺した人物でなくてはいけない。

戦場で死体を掻き集めても、戦死者では駄目なのだ。

ないのか、あるのか、分からない、外法の一つ。

信じるしかなかった。傷痕はそれしか、レゾンの選択肢を許さない。有無など言わせない。威圧感――。

「ふふ、今はそれが正解です。脳の分裂後、左右で記憶の共有もありません、片一方の目で見ている、私はシャシマールがあなたと峠越えをしていた時、見る事は出来たわけです」

「なら、二首大蛇をやったのは……」

間違いない。三級法具を持った人間に勝てるのだ。

二首大蛇すら簡単に屠るだろう。その――骨の巨手で。捻り潰すのだろう。

「私です。シャシマールが外骨げこつの使用を許可しましたからね、しかし、残念ですよ。私はシャシマールが外骨の使用を認めた時しか外へ能動的にアクセス出来ない。やはり、この体の主はシャシマールと言う事なのでしょう。何故か、感情筋は私の領域なんですよね、左脳の魂だと言うのにです」

やれやれと謂わんばかりにマールは言った。

「シャシマールとは誰だ？」

「マールの本名ですよ。シャシマール・イ・ヘリティマサーラ・イム・テランキシーラ、ご存知でしょう？ 先代六番分帝の片腕ヘリ

ティマサーラ家テランキシーラ伯、爵位は諸頭司もろくびつかさ」

「じゃあ——」

高貴な気配の正体。

名前を訊いた時、「どっち？」と問い返したのは、通名か長真名か？ そう言っていたのだ。

見る目があったと言う事か？

違う——。それは、レゾン本人が貴族に近い身分だったからだ。本当に見る目があったのなら、聖堂騎士として外法だと分かった筈。

いや、あの時は未だ、外法、怨霊魔術師の存在に懐疑的だった。さっきまでは、あの戦いとこのマールの姿を見るまでは未だ半信半疑だった。

それでも、今は確かに確信している。

「そう、シャシマールはテランキシーラ伯の一人娘、今、彼女は復讐に生きている」

「何故、協力する外法の骸骨戦士」

「博学になりましたね、入れ知恵されましたか？ 怨霊魔術師は存在する、そういう事です。何も帝国で覇を競っているのが大聖堂と貴族連合だけな筈ないでしょう？」

「だから、何故——」

「憤ってはいけません。人骨王の魂すら複合した魂なんですよ、怨霊魔術師に死を冒瀆され、天国へ行けなかった、私達は何を思うでしょう？ 復讐ですよ、私達の利害は一致しています。偶然に得た力、この人骨王の力、これを使えば怨霊魔術師にだって復讐出来る。本来、使役される筈だった運命が、シャシマールと融合する事ではなくなった。私達は彼女に感謝しています。恩返しです、それに脳が分裂される以前の記憶は私にもある。私は半分、シャシマールでもあるのですから」

シャシマールは語る。問うてもない事をベラベラと。
「なら——」

「だったら、どうしたらいいのか？　ですか？　あなたはここへ何をしに来ましたか？　私の正体を確かめに来た、違いますか？」

「違わない。ラガンの外法ではないか？　」と言う話。突然、中央から言い渡された外法調査。あの時の少女は何だったのか？　それを知りたかった。

「――」

「あなたはいい人だ。そして、余りに律儀です。聖堂騎士にして置くのは惜しい。シャシマールはあなたに感謝する反面、馬鹿な人だと思っていますでしょう。もっとも、彼女は言語中枢を殆どなくしていますし、記憶の共有がない以上、彼女の見た物と行動からしか分かりませんが。彼女はあなたに伝えなかったのでしょうか、二首大蛇を倒せる力を持ち、又、竜は死者の魂を恐れている事を。」

「だから、私が代弁しましょう。ありがとう、レズンさん。だから、私達もあなた殺したくはない。人骨王としての私は無差別の殺戮を望む、一方、人骨王になった魂達の総体として、そう、私達としては、なるだけ、犠牲は抑えたい。犠牲は私達のような復讐者を生みますから。」

「まあ、あなたが私がシャシマールに戻った時、どうするか、はあなた次第ですけどね」

「よく、喋るな。ほんと、別人だな」

「余裕と思ってもらっているですよ。この状況を見ればわかるでしょうけれど、第三級法具には流石に苦戦しましたが――私達を滅したいなら第一級を持つてくるといいですよ。それに、よく喋るのは言いたい事があり過ぎるんです。シャシマールが喋れませんからね、ロクに。なのに、私達は眺め、聴くだけがメイン。不思議に耳と目を除く右半身の支配はシャシマールにありますしね」

「でも、引き下がれないな」

「奴隷商人と司教が同一人物でもですか？」

「分かっているさ、ラダト司教の事は聖堂内じゃ有名だ、勿論、市民なら皆知^{みな}っているだろう。だけどな――」

「貴族に踏み躪^{にじ}られた過去がありますか？　なら、何故、あの時、シャシマールをエスコートしようとしたのは彼女が可哀想な人で平民に見えたから？　ですか？　それとも過去に没落貴族、逆恨み？　事情は如何でもいいでしょう。来るのなら、来てください」

シャシマールは挑発するように、手でおいでおいでをする。

レゾンは塩^{えん}碍^{がい}を両手でしかと握り、構えを取る。

今から始まるのは――

最初から無理な戦いなのは分かっている。ラダト一味との戦いっぷりを影から見ていてそれは十二分に理解出来た。

二首大蛇の死体が崖上から見つかった時、誰がやったか判らないのでは示しが付かないと、俺は第五級法具塩碍を賜った。彼女の言う通り、普通に考えれば一級法具でも持ってこないと駄目だ。

彼女は外法の被害者。怨霊魔術師に魂を乱された憐れな少女。

でも、救世堂は新しい世界の為のステップなのだ。それに、外法の被害者にして外法者だ。

貴族社会を終わらせ、市民社会を実現する為の、ここで人骨王を倒す事が出来たなら、俺は筆頭法守になれるかもしれない。なれなくても次席法守でもいい。

内部から救世堂を変革し、市民社会の実現の為、俺は戦う。暴虐貴族の息子として。

柳に風、そんな言葉が似合う。シャシマールは泰然として立っている。

構えもクソもなく、右手から醜く突き出した骨を地に垂らしている。

闇に白い骨が光る。

第五級法具塩碍は触れる物を塩に変える剣だ。火造のような破壊力もなければ、火竜を模するような大技も出来ない。縛身のように相手を拘束出来るわけでもない。

けれども、白兵戦に於いては中々の威力を発揮する。

触れた相手の武器を塩に変えてしまうからだ。魔術ベクトルを変

えれば、塩碍の名の通り、錆を与え、ナマクラに変える事も出来る。骨を錆びさせる事は出来ないだろうが、シャシマールの骨を塩に変える事は出来るだろう。

縛身の使い手がシャシマールを拘束出来なかったのは、彼女が複数の魂を持つ所為だ。縛身は魂を拘束する能力を持つ法具だから。使い手が、彼女の正体を知っていれば話は違ったのだろが。

火造も火を操るに過ぎない。直接的に魔法力を行使するわけじゃない。

だから、彼女を焼く事が出来なかった。

塩碍なら、彼女の骨――武器を一本つつ消していける。

指が五本、肘から一本、計六本、六回打ち合えばいい。武器さえなくせば、如何に外法とは言え、ベースは女、負ける筈はない。

骨が再生する可能性、それは低い。そんな超絶能力を持っているなら――あなたが私がシャシマールに戻った時、どうするか、はあな次第ですけどね――などと言う筈がない。

シャシマール状態では無防備と言う事。しかし、無防備な状態に戻らなくてはならない理由がある。それが、さっき飛ばしていた骨の指先、それらの再生に違いない。

「りゃあああ！」

レゾンは気合を上げて、突撃した。

やっとシャシマール――人骨王は構えを取る。

が、遅い。それに、早くても関係ないのだ。

ガキィ！ 耳を突く音。骨と刃の摺り合う音色。

骨の指が塩碍を挟み取る。

レゾンにとって、願ってもない事だ。

触れ合った瞬間、骨の指が解ける。否、塩に変わり風に流され、地に落ちたのだ。

計二本。

人骨王の顔が驚きに染まる。

動揺か、はてさて、誘っているのか、あからさまな隙が出来る。

挟んでいた指が解け、自由になった剣を更に横へ風ぐ。
切っ先が掠め、人差し指も風化。

その儘、更に力を込め、風ぎ、親指、そして腕を捻り逆方向に横に切り付け、小指も落とす。

一気に五本を持っていった。上出来もいい所だ。

残りは一本。肘から生えた一本のみ！

人骨王が背後へ飛ぶ。民家の家先の木箱に降り立つ。

「油断しました」

明らかに不服を眦が訴えている。

「そんな法具があったとは、等級だけで判断する、素人考えだったようです」

一方、レゾンは不適に笑う。勝機を感じて。

「根元から解けてしまうとは」

これでは間接を外し、骨を飛び道具にも使えない。しかし、人骨王は憤ってはいるようだが、焦ってはいない。

奥の手があるのか。

レゾンは用心深く接近する。

歩くよりも遅く、すりあし摺足で進む。

距離が縮まる。

人骨王は木箱上から動かない。お互いの視線が交錯する。

緊張が汗になって、レゾンの頬を伝う。

肘から生えた一本に関節は見受けられない、あれを飛び道具にするのは自殺行為だ。では、何を企んでいる。

人骨王の表情は以前、不満の色ばかりが浮かんでいる。

位の低い聖堂騎士にしてやられた、プライドがズタズタなのだろう。

「おりゃああ」

再び、レゾンの呐喊。

人骨王はスンデで躲わす。一瞬触れたズタズタのワンピースの袖が塩と化する。

勢い余って塩碇の切っ先は木箱に突っ込む。

普通の剣ならここで抜けなくなり、敗北が決定する。が、木箱は塩になり、剣筋を戻し、直に背後を向き、身構える。

人骨王は再び距離を取るように走る。

人骨王の逃げた先は家と家の間の路地。通りから離れ、狭い。

一撃必中を狙っているのか、人骨王は右手をあげ、胸の前で肘を折る。肘から飛び出た骨が正面を向く。

骨の先の狙いがレゾンをつえた。

ザリュ！

筋肉の千切れる音がして骨が放たれる。

骨は真っ直ぐ飛んで来る。

レゾンはニヤリと笑う。点で来るなら、簡単だ。

腰を落とす、次手が来てもいいように方膝だけつく。

パン！

レゾンの後方で炸裂音がし、骨は微塵になる。

着弾と同時に爆ぜた骨は厚い石の壁に大穴を開けた。

当たっていたなら、ミンチ確定だ。

しかし、躲わした。

人骨王に次弾はない。

「一つ分かった。あんたは戦いが下手だ」

人骨王はムっとした顔でレゾンを見た。

「竜は倒せたかもしれない、しかし竜もラダトも所詮、対人の戦いでは素人だ」

「そうかもしれませんがね」

余裕をみせる気か、引き攣り気味の顔を無理やり戻し、抑揚なく言う。

「司教も手練てだれを雇えばよかったのにな」

勝利が見え、勝機が開け、レゾンは饒舌になった。

「あんたはラダトとの戦いで手の内を見せた。俺は見てしまった、長話せずにさっさと俺を始末すればよかったのにな」

「全くです。まさか、第七法守と、それは恐らく五級ですね——に追い詰められるなんて、予想もしませんでした。三級以上は閲覧出来ずからね、ワザとでしようなか、そのような物の等級を低くして置くと言うのは」

三級以上の法具は聖堂図書館で閲覧出来るのだ。恐らく、民への恫喝の為、そして、大聖堂の力を貴族に見せ付ける為。

「いや、これじゃ竜は殺せないぜ、精々鱗の一枚を塩に出来る位だ。人骨王が人の大きさを助かったよ」

「物は使いよう——ですね」

言って、人骨王はフッと笑った。

皮肉か諦観か。奥の手か。

「そう言う事！」

袈裟切りに打ち付ける。

人骨王は後退するしかない。どんどん、路地深くへ。

道は狭くなる一方だ。

避けるが上手い。人骨王はギリギリで躲かし続ける。

偶にワンピースや銀髪に当たり、塩になる。しかし、本体に届かない。

避けるのは上手だ。

思えば、人骨王の体力はどの程度なのか？ ベースは少女でも遙かベースを凌ぐ体力を持つの可能性もある。早く、決定打を入れなくては。

戦いが長引く。

何度切り付けても当たらない。掠って終わる。

レゾンの息はどんどん上がる。長期戦に持ち込まれては不味い。レゾンの短髪から塩っぽい汗が飛び散る。飛沫は月灯りに輝く。

「ぐう」

思いつき切り下げ、手首を返して打ち上げる。

両方とも交わされ、次の瞬間、人骨王が転倒する。

レゾンの足掛けが決まっていた。剣筋ばかりに気が行っているか

らだ。

レゾンは塩碍を高く掲げ、手を逆に構える。

「おりゃ！」

気合と共に刺突。

串刺しにしようとする一撃を転がって躲す人骨王。

砂が塩に変わり、串刺し、躲す、串刺し、躲す、辺り一面、塩臭くなっていく。

「でりゃ」

更に、渾身の刺突。

が、上手く決まらなかった。それ所か、明後日の場所を切っ先はぶち抜く。目が痺れて、狙いが逸れたのだ。

ここぞとばかりに、両手をバネに、跳ね跳んで起き上がった人骨王の拳がレゾンの脇腹に決まる。部分的に残っていた指骨が服ごと肉を抉った。焦って、皮鎧を宿舎に忘れたのが悔やまれた。もう一つ、悔やむ事もある。塩撒きされた事だ。

涙が出、中々、視界が戻らない。

塩特有の臭いと痛み。

闇雲に剣を振ってみるも、当たる筈がなく、人骨王の連撃が続く。人骨王の左フックを受けて、レゾンは仰け反り、転ぶ。立場が逆転した。

地に叩き付けられた衝撃に、思わず手が緩み、塩碍を放してしまふ。

人骨王は空かさず、地に落ちた塩碍を蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされた塩碍は一気に路地の外へ滑っていく。辺りの障害物を軒並み塩に変えながら。

レゾンに馬乗りになろうと、人骨王がしゃがもうとし、それを足をバタつかせ阻止。

再度、人骨王は後ろに跳び、距離を取った。

レゾンは立ち上がる。大分、視界も戻った。

顎と脇腹が痛むが、やはり、ベースが少女だ。そこら辺の成人男

性よりは強い一撃だろうが、数発では、聖堂騎士を沈めるには至らない。

「馬鹿筋肉ですね」

呆れ半分怒り半分で人骨王。

「自慢でね」

不敵に鼻を鳴らす。見れば、人骨王の額にも汗が見える。

半死、彼女はそう言っていたが、人間としての生体が生きている。力の供給源は魔力ではなく、人体エネルギー。しかし、如何に目に見てもレゾンの方が消耗して映る。

月光が二人を照らす。

二人の荒い息が白い煙になって、吐き出される。

これで立ち技勝負――。

左足で地を蹴って、突撃。

ストレートを一発。

人骨王は胸を反らした。僅かに体も斜めに捻る。

頭部を狙ったストレートは肩越しを抜けて、

ザリユ――。

「かはっ」

レゾンの口から血の混じった唾液が飛んで――。

「ほんと、困ります。私は未だ不完全だと言うのに」

寂しそうな顔をして、右膝を引き、シャシマールは骨をレゾンの体から抜く。

服を破き、鋭利で巨大な千枚通しを思わせる骨が膝から生えていた。

先っぽのは血が滴る。

一滴が大地に落ち、塩に混じる。

「なんだと……」

余りの不意打ち。

そして、この感触。

体が痺れる。

「毒か」

体の自由が利かず、レゾンは呻く。

「ええ。中々、いい勝負でしたよ。もっとも、私は興味はないですし、無駄は好きでは——かもしれませんね」

遠くを見る目でシャシマールは言った。

そして、遠くで何やら声がする。

子供の声。二人分。

姉ちゃんいるか？ そう、聴こえる。

「カンがいいのも困ります」

やれやれとシャシマールは肩を落とす。

「くそう」

レゾンは呻く。

後一步だったのに。勝てそうだったのに。

余りに口惜しい。

「大丈夫です」

言って、シャシマールは歩き出し、後ろ向きにレゾンを一瞥だけし、一言。

——優しい子達が助けてくれるでしょう——。

段々、意識が遠のくを感じる。

離れてゆく足音。

手を突き出そうとするも、駄目だ。利かない。

——駄目か——俺の道は途絶えるのか？

考えようとし、もうそれ以上意識は保てず、視界は一度白んでは暗転した。

十一章

十一・終章

レズンは又しても同じ病院、同じ病室で目を醒ました。そして、又してもシスター・リフィーが介抱役だった。

しかし、一つ違うのは二人の子供の姿だ。

クラヤとイダサが何かを心待ちにするようにレズンを見ている。

「おはようございます。レズンさま」

シスター・リフィーは愛らしい笑顔をレズンへ注ぐ。余りに笑顔が眩しいので、つい、「おはよう」と言ってしまうってから、

「ああ、何日今度は寝ていたんだ？」

「三日です。何時もながら、素晴らしい体力ですね。今回は、神経毒だったみたいですよ？」

「そうか――」

「それより、聖堂騎士。あんた、いいヤツだね。大聖堂の連中は皆カスだと思ってたよ」

クラヤがベッド脇に両肘を付き、尊大な態度で言い放つ。救世堂病院だと言うのに臆する様子が全くない。

ここが個室でよかったと、レズンとリフィーは視線を交わして、安堵する。

「ラダトを成敗したんだってね」
フツチ

「え？」

リフィーが意味深な目配せをレズンへ。レズンは何となく状況を察した。

ラダトの死に伴い、都合の悪い事を消す気なのだろう。悪司教をレズンが倒したと言う事にして。

ラダトが殺された現場の状況を知っている生存者は恐らく自分とシャシマールだけだろう。何の復讐か、それは判らない。彼女しか

知らない、いや、彼女達しか知らない。彼女達は復讐鬼だ。ラダト一味が復讐の相手なら、皆殺しに違いない。

キンスマスドロク

しかし、現場には遺留品として人骨王の骨等があった筈――。見る人が見れば、きつと外法と判るに違いなく、外法に負けた、と言われかねない。

それは避けるべき、だから、色々な点を踏まえ、不整合があったとしても、自分に手柄を与えた。そう、レゾンは結論した。

クラヤは続ける。

「強いね。あんた。パパが来るまでもなかったね」

「パパ？」

「ハシュバイクニトーマ伯です、因みにこちらが子女^{むすめ}、こちらが養女です」

リフィーが答える。そして、二人を順番に指す。

「いいのか？ 貴族が――」

「如何しても面通しって言って聞かないので私が連れてきました。ハシュバイクニトーマ伯なら報復を恐れ、バレても――」

リフィーは舌を出す振りをして見せた。

意外と適当な言うか、大胆なリフィーの一面をレゾンは見た気がした。

「うん、あんたらしい人っぽいからね」

何を根拠に、と思ったが言わない。

「でも、あの数相手に单身、戦えたとは思えない。姉ちゃん、如何したの？」

姉ちゃん。リフィーの事ではないだろう。恐らく、シャシマールの事。

シャシマールは「優しい子達が助けてくれるでしょう」と言った。恐らく、この馴れ馴れしいガキと後ろでぼーとしてるガキが自分を助けてくれたのだろう、レゾンは思い至り、

「それより、俺を助けてくれたのか？」

「うん、倒れてて動かなかった。それに、お姉ちゃんが行けって言

ったんだよ」

初めて後ろの子——イダサが口を開く。

「姉ちゃんと一緒に戦ったんだよね？」

違う——と言い掛け、又目配せするリフィーを見てしまい、止める。何を話しているか、現場にいた訳でもなく、お姉ちゃんが誰か判らない筈だが、中々洞察力があるらしい。

「ああ……」

「やっぱり？　姉ちゃん強いもんね、ちょっと不気味だけど」

失笑するクラヤ。

「それで、知ってるんですね？　お姉ちゃんの居場所」

「如何して、訊く？」

無意識に睨んでしまったのか、イダサはリフィーの背に隠れてしまった。

一方、クラヤは何とか耐え、

「知りたいから。確かに、私の場合、パパが来るまでの辛抱だった。けどね、イダサは姉ちゃんじゃなかったら、駄目だった。友達の恩人、そして、私もお礼がしたい。そして、一番は姉ちゃんのあの技が何なのか知りたい」

一瞬、レゾンは驚く。目の前のガキは大物になりそうな気がした。「確信したんだ。姉ちゃんがぶっ壊してたアレ、法具でしょう？」

しかも、細部まで、あの死体を検分している。歳の頃は十二歳位か、末恐ろしい。

「あんたに言うのもアレだけど、救世堂の覇権をなした要因の一つは法具だと私は思うんだ。ニエフィムの決戦で先代天上皇帝が堂主に敗れた要因は間違いなく、それ」

「じゃあ、聖堂騎士の身分では言えないな。お嬢ちゃん、もう少し、駆け引きを習いなよ」

「む——。確かに、ベラベラ喋るなんてインコも出来るわね」

「それに、俺は答えられない。騎士だからではなく、知らないんだ。彼女は去ってしまったんだよ、俺が気絶している間に」

「そう」

残念そうにクラヤは下を向き。靴の先を擦り合わせた。

「なら、しょうがないね。お邪魔したね」

クラヤはイダサの手を引き、退室する。その背を見ながら、

「怖い子ですね」

「全くだ。それより、マールは何処へ行ったんだ」

「あれ？ その名前、前も言いましたよね？」

「ああ」

「如何したんです？ その子。ランガさんも気にしてますし、外法
つて話でしたし……」

「いや、いい。俺が報告するまで分からん筈だ」

「はあ……」

訳が分からないと言う困惑顔。

レゾンも深入りはせず、話題を逸らす。

「そうだ、シスター・リフィー。夜明けの市まで行った仲だし、俺
の従相にならないか？」

「従相ですか？ 私、今までここに務めてて、^{ハマファ}法術も魔術も、医術
も出来ませんよ？」

「いや、いいよ。俺は多分、来期、第三法守にはなっている筈だから」

「悪司教を倒した男ですからね。そう考えると、とてもいい話に聞
こえてきました。是非お願いします」

リフィーはちょこんと頭を下げて見せた。やはり、愛らしいとレ
ゾンは思った。

マールの、否、^{いや}シャシマールの、否——人骨王の……。

あれだけの長口上を聞いても、やはりと言うか、分からない事だ
らけだ。

何があって、彼女は何をしたのか？

彼女は只、本当に奴隷解放の為に——。

否、違う……。

全容は分らない。

未だ、自分は世界の少し裏っ側を除き見たに過ぎない。

今回の事は、最終的には結果オーライだったと言えよう。

しかし、しかし――。

純粹な探究心がある。これも又、嘘ではない。

外法とは？

怨霊魔術師とは？

貴族と救世堂が争う中の第三勢力。

これから、望めばいい。臨めばいい。

全ては足掛かりなのだ。

これから、きっと、始まる。

これは序章に過ぎないのだ。

これからの――。

レゾンはリフィーを見る。

相変わず、彼女は愛らしく笑っていた。

十一章（後書き）

一部完です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6570f/>

骨の王を宿した娘

2010年10月8日14時09分発行